

上野遺跡 X

UENO-SITE

1999. 3

長野県飯山市教育委員会

上野遺跡 X

UENO-SITE

1999. 3

長野県飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字常盤字中道3571-1、3572-1に所在する上野遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、住宅併用店舗建設に伴い、由科学氏より依頼を受けた飯山市教育委員会が調査団を編成して実施した。なお、調査に伴う費用は、事業主・市教委で分担した。
- 3 上野遺跡は過去9回の発掘調査なされており、今回の報告は10回目となることから、上野遺跡Xとして報告するものである。
- 4 今回の調査によって検出された発見された遺構・遺物は、約800㎡を調査して縄文時代溝状土坑1、弥生時代竪穴住居址3、掘立柱建物址10、古墳時代竪穴住居址1、同方形周溝墓3、平安時代竪穴住居址1、同土坑墓1及び各時代土器である。
- 5 調査にかかる体制は以下のとおりである。

(教育委員会)

教 育 長	岩崎 彌 (～平成10年12月25日)
	清水 長雄 (平成10年12月26日～)
教 育 次 長	井出 澄夫 (～平成10年12月25日)
	石沢 雄司 (平成11年1月1日～)
生涯学習課長	平野 英孝
同社会教育係長	山室 茂孝
同係 主 査	伊達 信寿
同係 主 査	望月 静雄

(発掘調査団)

団 長	高橋 桂 (飯山市文化財保護審議会会長)
担 当 者	望月 静雄 (飯山市教育委員会事務局職員)
調 査 員	田村 澁城 (飯山市埋蔵文化財センター調査員)
〃	常盤井智行 (〃)

発掘作業参加者

高橋武・植中高見・岩井伸夫・高橋喜久治・土屋久栄・宮本鈴子・岸田志づ子・万場義秋・樋口栄・滝沢きよえ・鈴木操
伊達信寿 (飯山市教委)

整理作業参加者 小林正子・小林裕子・望月洋子・小林美里・藤沢和枝

- 6 発掘調査から整理作業において、以下の方々・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)

吉原佳市・上野区・常盤公民館

- 7 本書は、高橋桂団長指導の下、藤沢和枝が図面整理・遺物実測・トレース作業を行ない、常盤井が土器の実測を担当した。執筆は望月・常盤井が行ない文責を目次に明記した。
- 8 発掘調査にかかる図面・遺物等の資料はすべて飯山市埋蔵文化財センターにて保管している(電話0269-65-3993)。

目 次

I 経過	望月 静雄	1
1 調査に至る経過		1
2 調査経過		1
3 層序		2
4 調査日誌抄		2
II 遺跡群の位置と概要		4
1 遺跡群の位置		4
2 上野遺跡発掘調査の記録		4
3 周辺遺跡		6
III 発見された遺構と遺物	常盤井智行	12
1 縄文時代		12
1) 遺構		12
2) 遺物		12
2 弥生時代		12
1) 遺構		12
2) 遺物		13
3 古墳時代		14
1) 遺構		14
2) 遺物		14
4 平安時代		16
1) 遺構		16
2) 遺物		16
IV おわりに	望月 静雄	34

挿図目次

図1 上野遺跡大地区割 (1:10,000)	図13 弥生時代の掘建柱建物址 (1:80) (3)
図2 土層模式図	図14 古墳時代の竪穴住居址 (1:40)
図3 調査地周辺の地形 (1:1,500)	図15 古墳時代の方形周溝墓 (1:100) (1)
図4 上野遺跡の位置 (1:50,000)	図16 古墳時代の方形周溝墓 (1:100) (2)
図5 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)	図17 平安時代の竪穴住居址 (1:40)
図6 調査地全体図 (1:160)	図18 平安時代の土坑・土坑墓 (1:20)
図7 縄文時代の落とし穴 (1:40)	図19 弥生時代の土器 (1:4)
図8 弥生時代の土製品 (1:2)	図20 古墳時代の土器 (1:4)
図9 弥生時代の竪穴住居址 (1:80) (1)	図21 平安時代の土器・陶器 (1:4)
図10 弥生時代の竪穴住居址 (1:80) (2)	図22 弥生時代の石器 (1:1 1:3)
図11 弥生時代の掘建柱建物址 (1:80) (1)	図23 弥生時代の石器 (1:3)
図12 弥生時代の掘建柱建物址 (1:80) (2)	

写真図版目次

- P L 1 調査地区全景（東より）
調査区遺構全景
- P L 2 作業風景
現地見学開（平成 10 年 5 月 27 日）
- P L 3 S K 176（縄文時代落とし穴遺構） Y15 号竪穴住居址および S D 12
Y16 号竪穴住居址 Y16 住内出土壺形土器および石器
Y16 住内出土甕形土器 Y17 号竪穴住居址
Y18 号竪穴住居址 33 号掘立柱建物址（S B 33）
- P L 4 H36 号竪穴住居址（古墳時代） S D 11 方形周溝墓溝断面
H37 号竪穴住居址（平安時代） S K 175（平安時代土坑墓）
S K 175 内遺物出土状況
- P L 5 弥生時代の土器
- P L 6 古墳時代の土器
- P L 7 石器・石製品・土製品

I 経過

1 調査に至る経過

飯山市は、埋蔵文化財の保護については公共機関による土木工事ははじめはじめ、個人住宅や店舗等についても出来る限りの把握に努めており、市広報等でも保護についての啓発活動を行なっている。また、農業委員会からの農地転用申請書などの閲覧により小面積でも対応しようとしている。しかし、直前になって計画が判明すると経費負担等に対応することが困難な場合も多い。

平成9年12月 請負業者より上野遺跡内において店舗建設の計画が示され、埋蔵文化財包蔵地の有無について照会を受けた。計画地は上野遺跡の南端にあたり、北隣接地の調査では方形周溝墓や住居址、礫床墓などが発見されている。したがって、遺構の発見される可能性は極めて高く、事前の調査は必要である旨の回答をした。

平成10年3月末 業者並びに施主より、計画を予定通り進めるので埋蔵文化財の調査について協力依頼があった。店舗並びに一部住宅を併用するとのことであり、施主のご協力をいただいて、行政と施主とで50%づつを負担するという事で合意された。

なお、建設計画により5月末までに発掘調査を完了するよう協力を求められた。

2 調査経過

今回の発掘対象地は、住宅併用店舗建設予定地で、上野丘陵の南端にあたる。東側のバイパスを挟み千曲川が丘陵下を北流している。このバイパス建設に伴い昭和63年に調査を開始して以来、すでに9回の発掘調査が行なわれてきている。

発掘面積は、約800㎡、平成10年4月28日より調査を開始した。6月より工事着手とのことであり、その前までに調査を完了することが定められており、5月の連休前に慌ただしく着手したのが実情である。

調査対象地はほぼ平坦地であったが、西・南に徐々に標高を下げていっており、削土されて遺構の破壊が激しい北・東側を中心として調査することとした。なお、残土置き場の確保が出来ないため、遺構破壊の危険の少ない西・南側をそのスペースに空けた。

大地区割りは平成4（1992）年に国土座標第8系に基づいて設定した100m方眼50区画を踏襲。

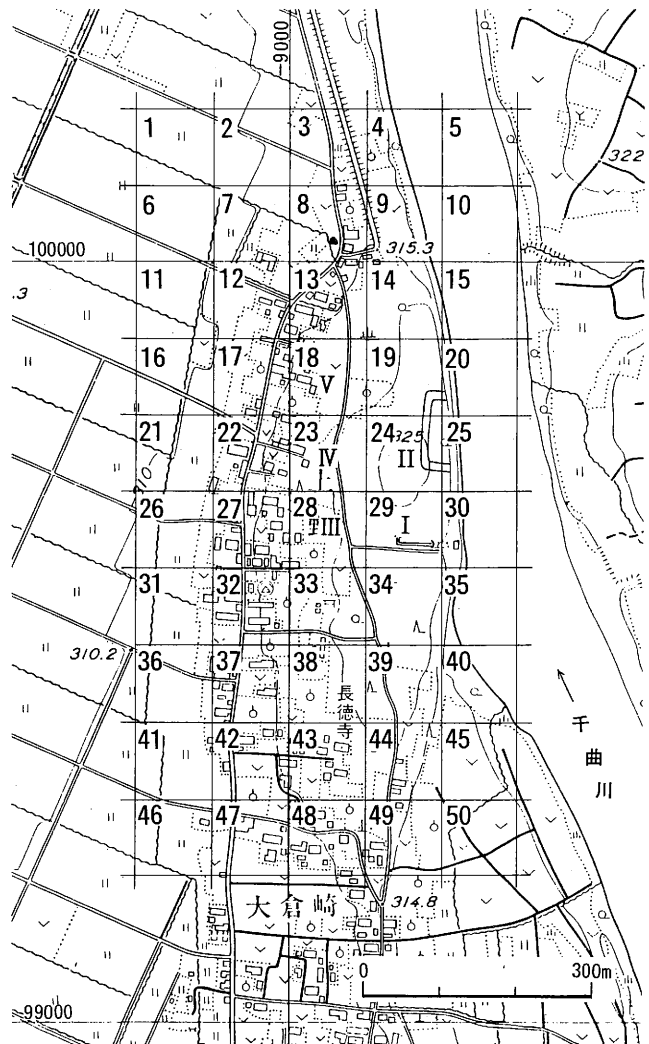


図1 上野遺跡大地区割 1 : 10,000

今回の区画は44区である。大地区内は5m方眼とし南から北へ1～20、西から東へA～Tの付番をしてグリッド表示とした。

遺構番号は前回までの付番の次の番号からの連番とした。ピットは建物としてまとまるものは建物内で通番とし、他はグリッドごとに通番とした。今回付番したピット以外の遺番号は次のとおりである。

土坑	S K	173～176
掘立柱建物址	S B	31～40
弥生時代住居址	Y 住	15～18
古墳時代以降住居址	H 住	37
溝・周溝墓	S D	11～13

遺物の取り上げは、遺構内出土土器についてはドットマップを作成して取り上げたが、遺構外はグリッド一括で取り上げている。なお、完形土器や特別な出土状態のものには微細図を作成している。今回の遺物注記は、98UN44（1998年上野遺跡44大地区）である。

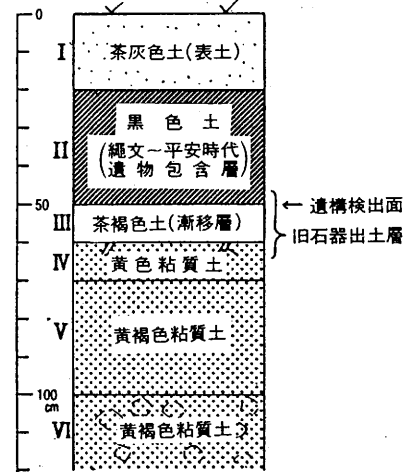


図2 土層模式図

3 層序

上野遺跡の基本的な層序は、上位からI層表土・耕作土、II層黒色土、III層茶褐色土（漸移層）、IV層横褐色土層である。遺物包含層は、II層の黒色土中であるが、遺構確認は、III層上面で行なった。

4 調査日誌抄

4月20日 埋蔵文化財センターにて器材準備。

4月27日 重機による表土除去、器材・テント搬入。

4月28日 調査開始式。発掘調査開始。北からジョレンがけ精査開始。バイパス東の森の中の杭から基準杭をもってくる。調査地内グリッド設定（44区、B～G-12～16）。主に黒色土層から弥生土器出土。4月30日 E・F-16さらに掘り下げ。C～F-15・16区ジョレンがけ精査。C～E-16区、F-15・16区で方形周溝墓周溝らしき輪郭検出。B-16区北西隅幅30cmのトレンチ掘り、黒色土あと30cmは続き深いもよう。

5月1日 B-12区を除き全面精査。方形周溝墓2、弥生中期竪穴住居址（C・D-15・16）（D・E-13・14）、古墳初頭竪穴住居址（E-16）を検出、それぞれ幅30cmのトレンチを掘り始める。E-15・16の土器写真撮影、E-15区の遺物とり上げ。D-13区において弥生中期壺完形品、石片群出土。

5月6日 方形周溝墓2基トレンチ及び周溝を掘り始める。Y住（C・D-15・16）プランが不明確、広げて掘る。H（平安）住、周溝墓との切りあい確認するが、床と周溝のレベル差なし。D-13区Y住午後よりトレンチ1本着手。

5月7日 平安住居プランほぼ明確となる。周溝墓2基掘り下げ続行。

5月11日 今までの遺構内出土土器、遺構名を付して取り上げ。SD11精査続行。H37住ほぼ輪郭判明。写真撮影・遺物分布図作成。Y13住

5月13日 E・F-12～14、C-14区ジョレンがけ精査。遺構内が雨のため足場が悪いので、ジョレンがけとする。

5月14日 継続調査。

5月15日 E-15区精査、ピット3ヶ所掘る。Y14住掘り下げ続行、周溝を検出、東北に拡張している。Y14住を切る南の溝SD13掘り下げ開始。Y14住内で石斧2ヶ出土。

5月19日 SD11、SD12セクション帯土層写真撮影、のち取りはずし。Y13住セクション帯はずし。H36住北壁探したがよくわからず。H37住セクション帯はずし、柱穴掘り。SB31掘り下げ。Y14住完掘に近づく。SD13はB-12区までのびる。

5月20日 SD12セクション帯はずし、ほぼ完了。Y13住セクション帯はずし完了、柱穴掘り開始。SD11土層写真撮影。H37住完掘写真撮影。Y14住全景写真撮影、遺物出土状態写真撮影。SD13掘り下げ続行。

5月21日 Y13住柱穴掘りほぼ完了。SD13ほぼ完掘。周溝墓、竪穴住居外精査、掘立柱建物いくつか検出。C-14区土坑(SK173)完掘写真撮影。重機による表土除去。

5月22日 Y13住、H36住精掃、写真撮影。掘立柱建物SB31~35写真撮影。SD13完掘、写真撮影。B区遺構掘り下げ、SK命名。SD13溝内側C・D-12区で弥生中期住居址検出。用水東杭打ち。G~I-13~16区ジョレンがけ開始。

5月26日 SB37・38柱穴掘り下げ。Y15住掘り下げ、ほぼ完掘。C-13・14区柱穴掘り下げ、G-13区とともにSB39となる。G~I-13~16区ジョレンがけ精査のち掘り下げ。H・I-15・16区長方形土坑SK175、Y16住掘り下げ。I-14区SK176は落とし穴。H・I-13・14区は柱穴SB40となる。

5月27日 午後3時から現地見学会。40名参加。

5月28日 SD11東側掘り上げ。SK175平安土坑墓、土器3点掘り上げ、写真撮影。

5月29日 遺構実測作業。常盤小学校6年生見学。現場片づけ。

5月30日 遺構実測作業、レベル完了

II 遺跡群の位置と環境

1 遺跡群の位置

上野遺跡は、長野県飯山市大字常盤字外和柳に所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の峡谷地帯（通称 市川谷）を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至りここで信濃川と名を改め、いわゆる津南段丘群を形成してやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地は南北に16km、東西6kmの紡錘形を呈し、盆地底の標高は300～320mを計る。西縁は黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.8m)等比較的低い関田山地によって画されている。ここには越後に通ずるいくつかの峠道が存在している。一方東縁は、毛無山(1640.98m)等三国山脈の支脈によって、断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は、飯山市街地より戸狩地区に至る長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて、西側に外様平、東側に常盤平が広がり、当地方最大の穀倉地帯となっている。東側は、その南半にかつての千曲川氾濫源である木島平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって段丘・丘陵などの微高地が開析谷を隔てて連続的に連なるという複雑な地貌を呈している。遺跡が位置する上野丘陵は、常盤平の東端に位置するが、千曲川を挟んで盆地東縁の段丘群と相対している。

飯山盆地は、第三紀水成層を基盤とし褶曲構造によって形成されたとされている。すなわち、西側を画する関田山地、盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し、外様平、常盤平が内斜部となる。遺跡の位置する上野丘陵も背斜部に相当し（中村 1962）、対岸の瑞穂地区の段丘とは千曲川の下刻により分断されたとされている。この段丘は、上位・下位の二面に分けられるが（小泉 1979）、上野丘陵は日焼・屋株遺跡が立地する段丘と同様に下位段丘に含まれる。

2 上野遺跡発掘調査の記録

上野丘陵は、古くから古墳、館跡、弥生時代中期大型蛤刃石斧の出土として知られている。そして、飯山北高等学校地歴部による分布調査で、玉髓製の搔器数点を採集し、旧石器時代遺跡も存在することが判明した。

発掘調査は、昭和63年の国道117号線バイパス常盤大橋橋台工事に伴う上野の館（大倉崎館跡）を端緒として、平成9年度までに毎年のように9回の発掘調査が行なわれている。

その結果、丘陵全面が遺跡の範囲であることが判明し、旧石器・縄文・弥生・古墳・平安・中世の一大複合遺跡であることが明らかとなった。特に弥生時代から古墳時代にかけては当地方の拠点適し遊楽のひとつであったと推定される遺構・遺物が出土している。発掘面積は、今回を含め延べ約15,000m²となる。

上野遺跡発掘調査一覧

1988（昭和63）	9月28日～11月22日	上野の館（大倉崎館）跡	1000m ²
1989（平成元）	6月13日～9月19日	117号バイパス	5000m ²
1990（平成2）	6月28日～7月11日	市道7-335号線	300m ²

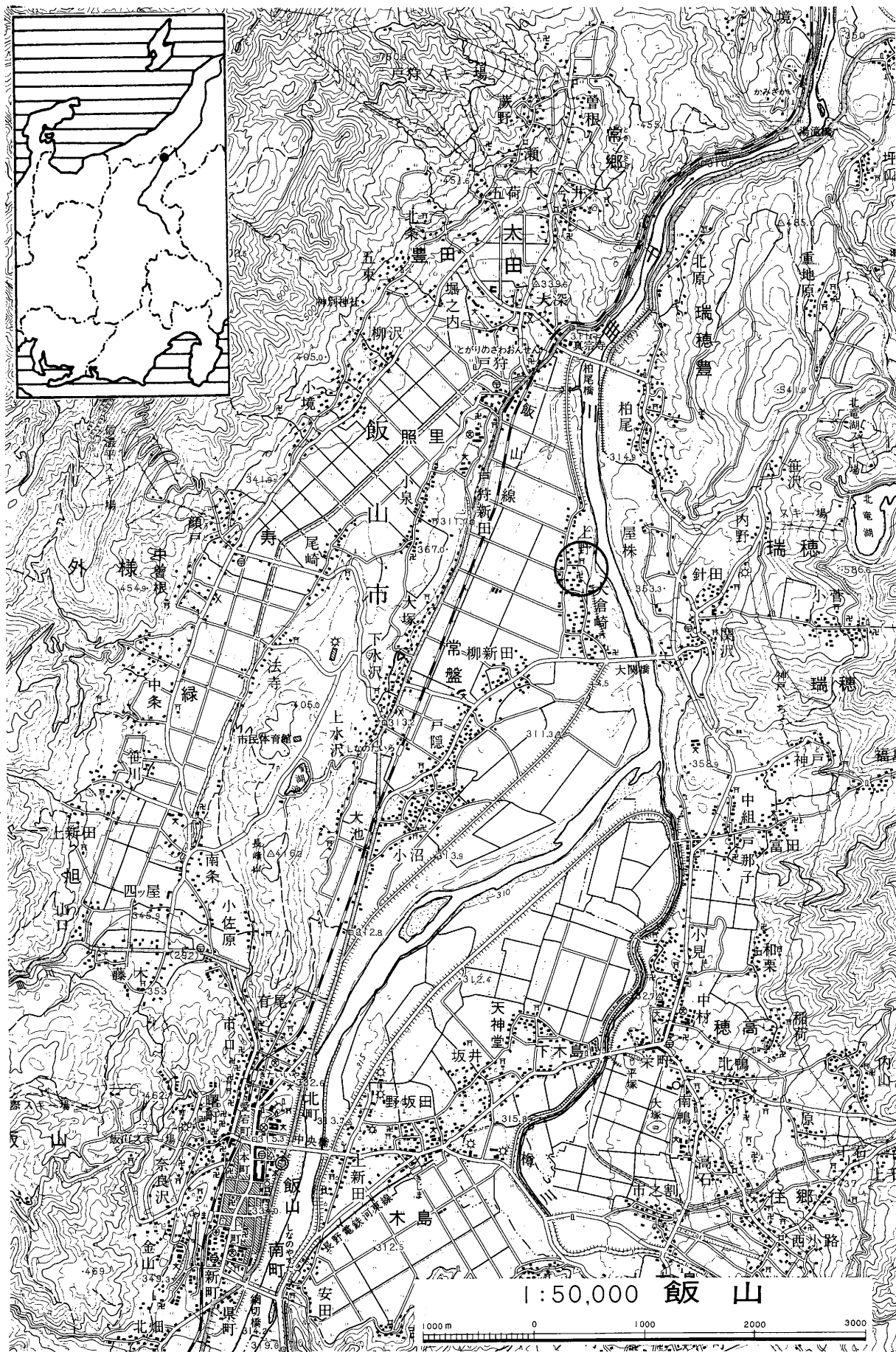


図4 上野遺跡の位置 1:50,000

1992 (平成4)	6月11日～10月2日	工場団地取り付け道路	3700m ²
1993 (平成5)	5月20日～7月30日	チェーン着脱場	1500m ²
1994 (平成6)	5月11日～7月2日	揚水機場	1100m ²
1994 (平成6)	9月19日～9月29日	店舗・住宅試掘	350m ²
1995 (平成7)	4月20日～5月31日	店舗・住宅本調査	870m ²
1996 (平成8)	4月24日～5月30日	住宅兼店舗・農機具格納庫	470m ²
1998 (平成10)	4月28日～5月31日	住宅兼店舗	800m ²

これまでに検出された主な遺構・遺物 (今回検出分を含む)

旧石器時代	石器群 (礫群含む) 25地点、ナイフ形石器・搔器・尖頭器ほか
縄文時代	落とし穴53 (溝状50・長方形土坑3) 早期・前期・中期・後期・晩期土器片・石器
弥生時代	中期住居址14 後期住居址3、掘建柱建物址48、木棺墓72 (内礫床木棺墓2) 土坑墓10、中期・後期土器、石器・勾玉・管玉・紡錘車ほか
古墳時代	初頭北陸系竪穴住居址1 掘建柱建物址1 初頭方形周溝墓12 初頭北系土器
平安時代	竪穴住居址36 掘建柱建物址10 土坑墓6 木棺墓2 集石土坑2 溝1 土器 陶器 鉄製品 フイゴ羽口 鉄滓 石製丸靱 砥石 軽石 土錘ほか
中世	館跡1 輸入陶磁 国産陶器 瓦質土器 石臼 鉄製品 銭貨ほか

3 周辺遺跡

遺跡の所在する常盤地区から対岸の瑞穂地区にかけては、多くの遺跡が存在している (図2)。ただ分布については、必ずしも明確に把握しているわけではない。以下に明らかな部分について時代別に述べて行くことにする。

1) 旧石器時代

飯山地方は時代の遺跡が比較的多く存在していることで知られているが、特に密集しているのが太子林遺跡を中心とした周辺である (図2)。飯山地方において調査がなされている遺跡には小坂・太子林・関沢・日焼・屋株・上野・小泉・トトノ池南・新堤遺跡など数多い (飯山市教委 1981・1991・1992 望月 1982 a ほか)。これらの調査結果から、飯山地方の旧石器時代編年試案を作成したが (飯山市教委 1991)、現在までのところいわゆるA T下位の石器群は発見されていない。

ここでは、太子林遺跡周辺遺跡に限り若干の説明を加えたい。昭和63年に調査した日焼遺跡では、小型ナイフ形石器に代表される石器群が発見された。黒曜石製の円形搔器の伴出が特徴的で、終末期ナイフ形石器石器群として捉えている。同じ年に調査した屋株遺跡では、尖頭器を特徴とする石器群が出土している。また、昭和63年以降数次にわたる上野遺跡の調査では、玉髓製の搔器に尖頭器が伴うと推定される石器群が出土している。

この他、調査はなされていないが、千苺 (中島 1982) をはじめ城ノ前、木原、北竜湖、内野でも良好な石器が採集されている (高橋 1980)。

以上の遺跡の立地は、大部分が千曲川河岸の段丘上に立地しており、千曲川と密接な関係を有していたことは想像に難くない。また、北竜湖例は湖沼周辺に立地する遺跡の典型例として注目される。

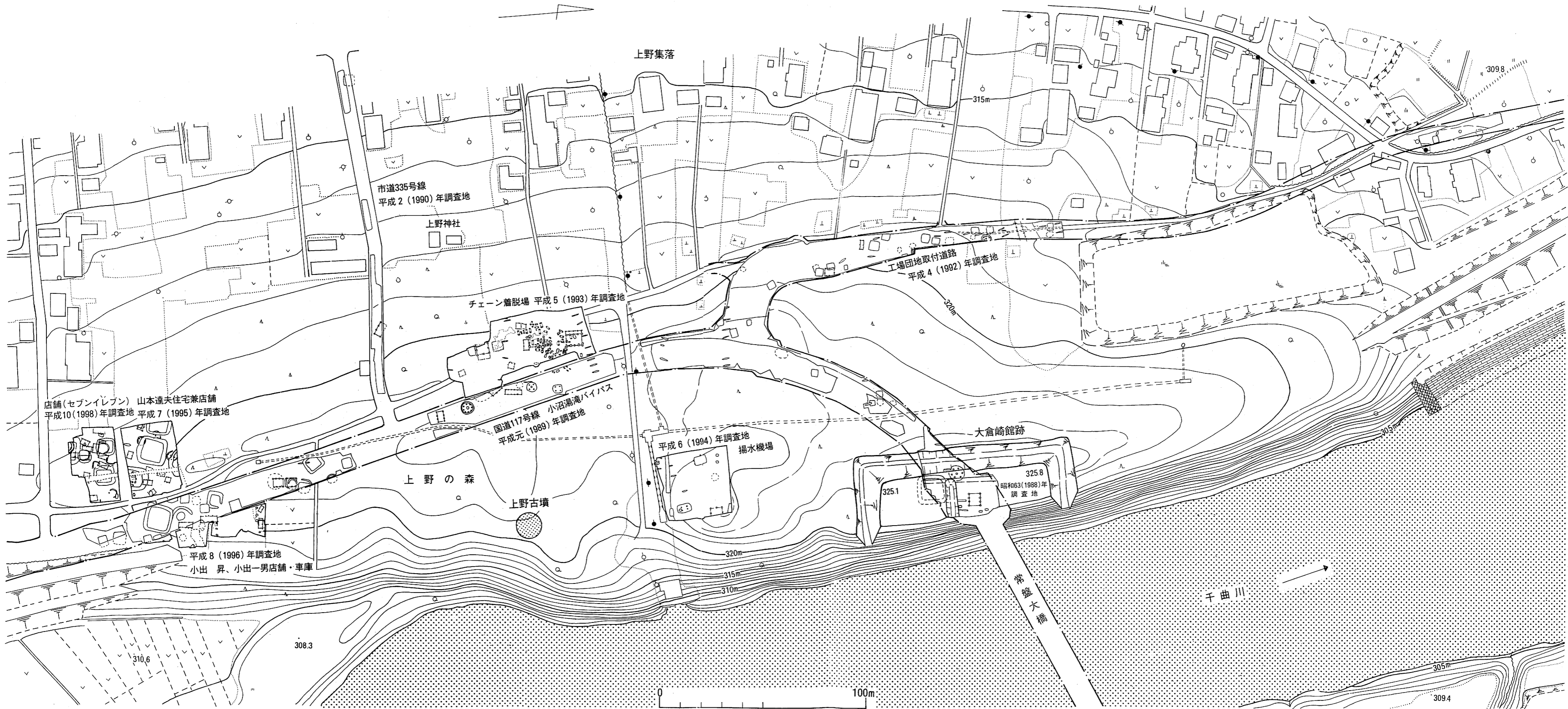


図3 調査地周辺の地形 1 : 1,500

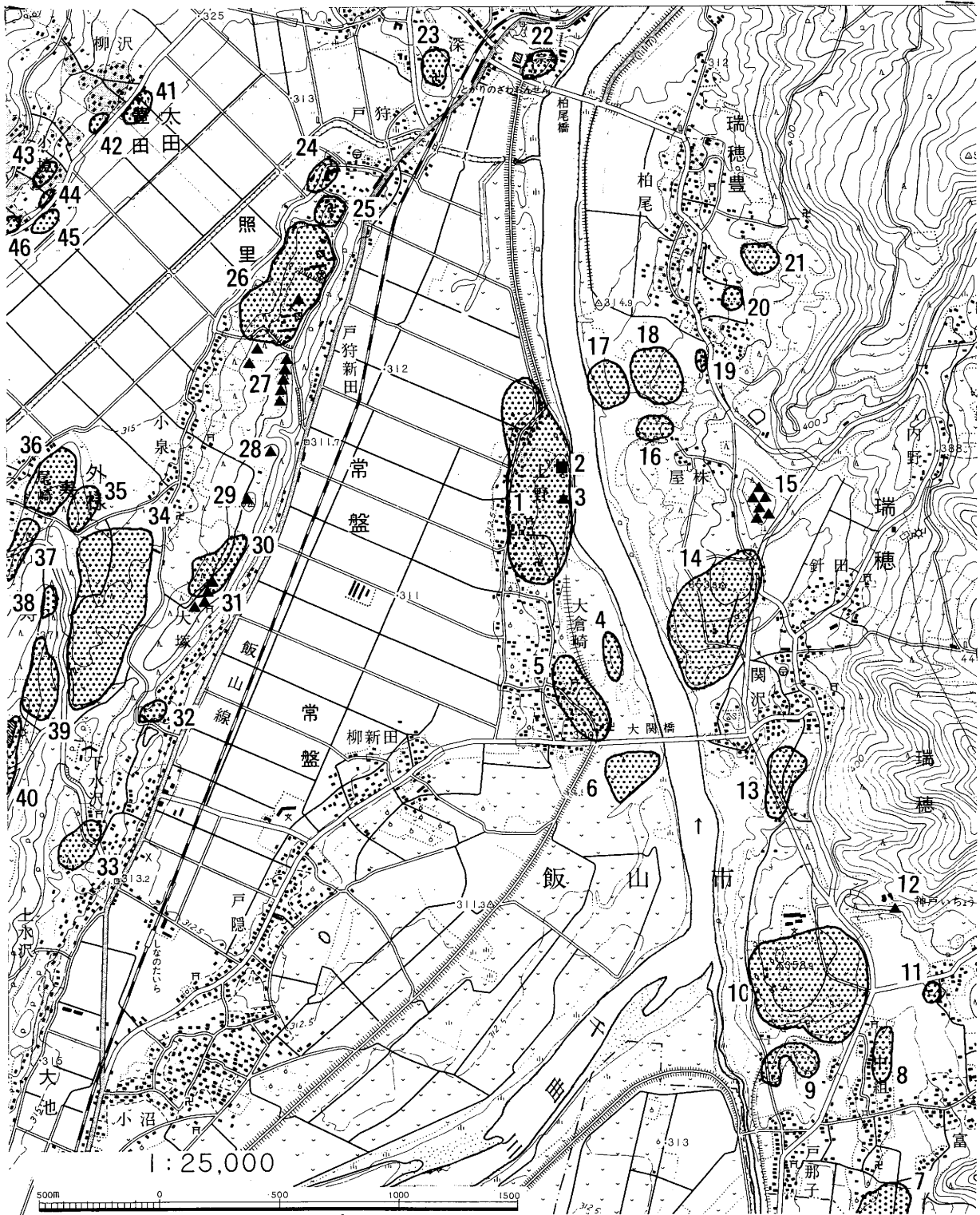


図5 周辺の遺跡分布図 1:25,000

- | | | | | | | |
|--------------|---------|------------|----------|-----------|-----------|---------|
| 1. 上野 | 2. 大倉崎 | 3. 上野古墳 | 4. 大倉崎Ⅱ | 5. 大倉崎 | 6. 瀬附 | 7. 尾崎 |
| 8. 城の前 | 9. 千苺 | 10. 宮中 | 11. 猿飼田 | 12. 飯綱堂古墳 | 13. 関沢 | 14. 太子林 |
| 15. 向峰古墳群 | 16. 屋株 | 17. 日焼 | 18. 南原 | 19. 堺ノ沢 | 20. 柏尾南館 | 21. 上ノ原 |
| 22. 真宗寺 | 23. 岡峰 | 24. 旧照里小学校 | 25. 光明寺前 | 26. 照丘 | 27. 照里古墳群 | |
| 28・29. 茶白山古墳 | 30. 大塚 | 31. 大塚古墳群 | 32. 水沢 | 33. 下水沢 | 34. 小泉 | |
| 35. 両面寺 | 36. 柳町 | 37. 山崎 | 38. 尾崎南 | 39. 東長峰 | 40. 西長峰 | 41. 柳沢 |
| 42. 柳沢B | 43. 鶴屋敷 | 44. 桜沢 | 45. 小境 | 46. 押出 | | |

2) 縄文時代

縄文時代に属する遺跡で、最も古い土器が採集されているのは北竜湖遺跡である。湖岸より裏表縄文・押型文・条痕文系土器片が採集され、草創期・早期に位置付けられる（高橋 1980）。道添遺跡でも条痕文系土器が採集されている。

前期の遺跡では、大倉崎遺跡以外は量的にも少量の遺跡がほとんどである。大倉崎遺跡に近い瀬付遺跡、北竜湖遺跡、宮中遺跡、太子林遺跡、などで出土している。宮中遺跡は、昭和53年に市立東小学校建築にともない試掘調査を行い、諸磯b式に比定される格子目文土器が出土したが、遺構は検出されなかった（飯山市教委 1979）。また、太子林遺跡は昭和55年に調査が行われ、有尾式土器片と土坑が検出されている（飯山市教委 1981）。

中期の遺跡では、まず上ノ原遺跡が挙げられる。調査は行われていないが、舌状台地の縁辺から大量に採集されている。五領ヶ台系・阿玉台系土器が若干認められるものの、多くは蓮華文・格子文などを特徴とする北陸の新保・新崎式土器に比定される土器が多い（高橋 1980 a）。このほか宮中では古くから土器片が多く採集されている。

後期では宮中遺跡が重要である。昭和55年の調査によってわずか100㎡の範囲に23基の石棺墓が検出された。墓坑内より浅鉢が伏せた状態で出土し、さらに浅鉢の中から竹製の漆塗櫛が出土している。ほかの石棺墓からも碧玉・耳栓状耳飾りが出土している。周辺より出土した土器より堀ノ内～加曾利B式期に比定している（高橋 1980 b）。なお北竜湖遺跡でも若干出土している。

晩期の遺跡は、上野遺跡において少量検出されているに過ぎない。

3) 弥生時代

稲作が開始された弥生時代は、飯山地方では、秋津田草川尻遺跡・長峰丘陵上の諸遺跡が著名であり、瑞穂地区では大型蛤刃石斧が単独で採集されていたにすぎない。本上野遺跡では、中期から後期にかけての集落址16軒、掘建柱建物址25棟以上が発掘されており、加えて木棺墓・礫床墓が72基が検出されている。おそらく当該期の中心的な集落であったと思われる。

なお、長峰丘陵上の遺跡のうち分布図に示した遺跡は、旧照里小学校遺跡、光明寺前遺跡、照丘遺跡の3遺跡である。調査が行われたのは照丘遺跡で、住居址をはじめ弥生中期栗林式土器・建築用材と推定される木製品が出土している（高橋 1962・飯山市教委 1993ほか）。

4) 古墳時代

三世紀末から七世紀にかけて王もしくはそれにつかえた豪族たちが大きな墳丘の墓を造った時代である。上野古墳、向峰古墳群、飯綱堂（狐塚）古墳、神戸古墳群が確認されている。飯綱堂古墳では石室が露呈しており、土師器・鉄鏃が出土したという。また、照丘遺跡では円形周溝が検出され、古墳の周溝の可能性がある（高橋 1968）。

一方集落遺跡では、弥生時代に続き上野遺跡が挙げられる。しかし、上野遺跡では前期の集落址や周溝墓、北陸系土器などで、中期・後期の集落址は発見されていない。

5) 古代・中世

奈良時代以降をまとめて概観する。現在までのところ明確に奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡では上野遺跡、尾崎遺跡、屋株遺跡、大倉崎Ⅱ遺跡が挙げられる。本上野遺跡では堅穴住居址36軒、掘建柱建物址11棟などが発掘されており、古墳時代以降再び当地域の中心的集落となったもの

と思われる。

尾崎遺跡は圃場整備によって無残にも破壊されてしまったが、多量の土師器片が採集されている。屋株遺跡は昭和63年に調査がなされ竪穴住居址1軒、土坑が検出され、須恵器坏、蓋、土師器坏、甕等が出土している。年代は9世紀中～後半におかれる。大倉崎Ⅱ遺跡は千曲川べりの新期河岸段丘上にありやや小高くなっている。上野遺跡の平安期集落址との関係や生業について、注目される立地環境である。

平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。城館跡は、大倉崎館跡、柏尾南館跡、関沢館跡、犬飼館跡、神戸城跡などが確認されている。また、集落遺跡は、現在までのところ調査を行っていないし、また確認もされていない。これは、中世の考古学的調査が充分に行われた経過がないためであって、今後明確になるであろう。例えば、大倉崎地区内で中世珠洲系陶器の完形品が発見されており、集落址の存在を裏付ける資料が出はじめつつある。

引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1979『宮中遺跡—分布確認調査報告—』
飯山市教育委員会 1981『太子林・関沢遺跡』
飯山市教育委員会 1989『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』
飯山市教育委員会 1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ』
高橋 桂 1962 「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃14-11』 信濃史学会
高橋 桂 1980a 「瑞穂のあけぼの」『新編瑞穂村史』 瑞穂村史刊行会
高橋 桂 1980b 「宮中遺跡発掘調査—石棺状遺構を中心として」『高井51』 高井地方史研究会
中島庄一 1982 「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について」『信濃34-4』 信濃史学会
望月静雄 1982a 「太子林・関沢遺跡」『長野県史考古資料編全1巻(2) 主要遺跡北・東信』
長野県史刊行会
望月静雄 1982b 「北信濃関沢遺跡の石器群」『信濃34-4』 信濃史学会

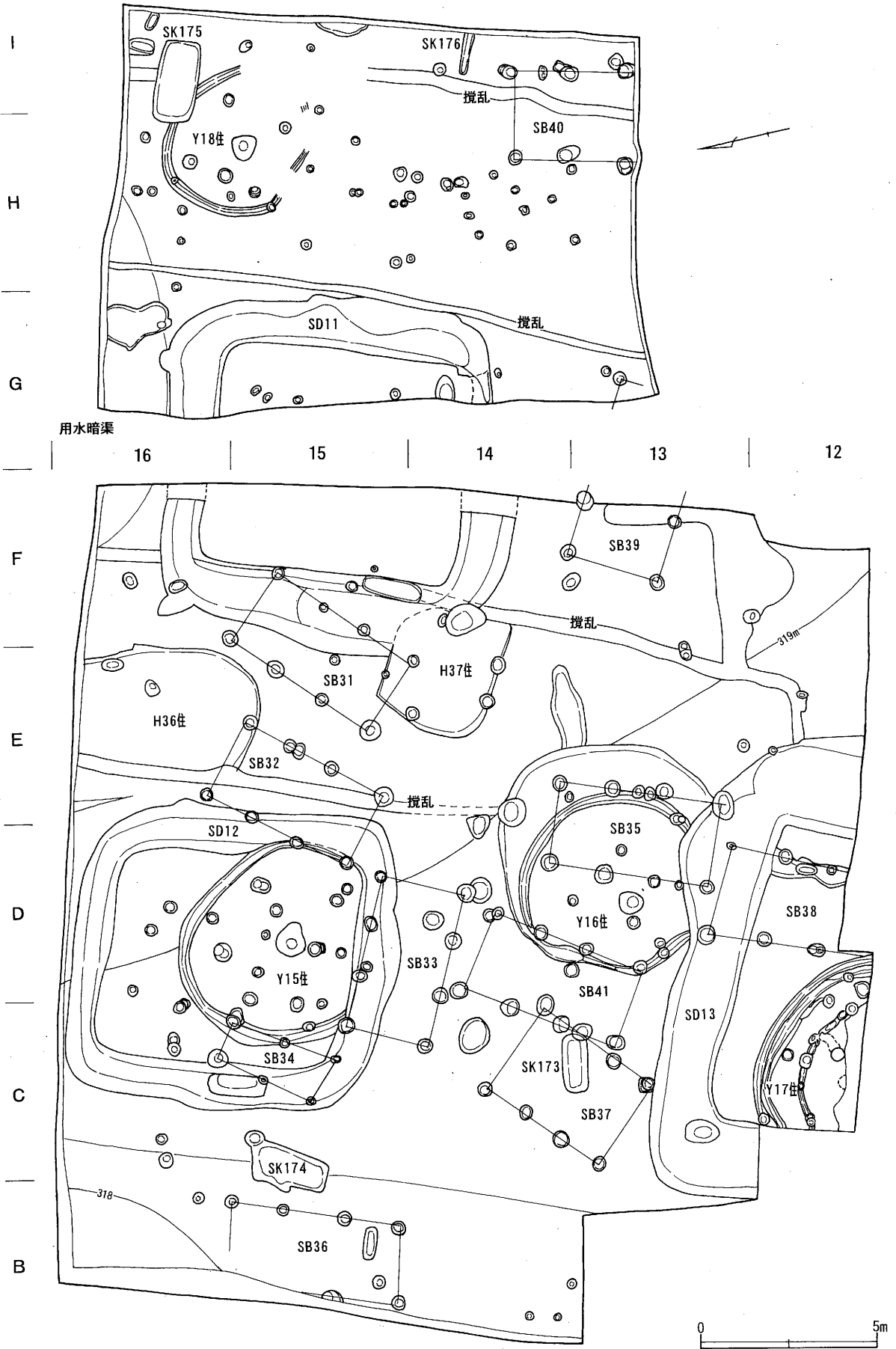


図6 調査地全体図 1 : 160

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 縄文時代

1) 遺構 (図7 SK176)

調査地西端のI-14区から、トラップピット (落とし穴) と呼ばれる溝状土坑1基が検出されている。主軸は東西方向で丘陵主軸に直交する。約1m分を検出。溝状土坑は並列して直線ないし弧状に並ぶ例が多い。本例は周辺の調査から考えると南へ延びる列の北端例と考えられる。

2) 遺物

図示していないが、早期絡条体圧痕文土器片1片、前期未諸磯式土器片など4片が出土している。

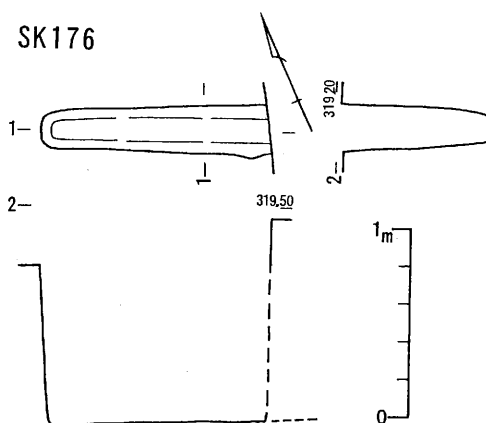


図7 縄文時代の落とし穴 1:40

2 弥生時代

1) 遺構

A 掘立柱建物址 (図11~図13)

床面積約13m²程の小型の掘立柱建物址が10棟検出されている (表1)。小型のSB34が1間×2間の他は1間×3間である。

竪穴住居址との切り合い関係は、Y16住とSB41・SB35で確認できる。SB41南東隅柱穴はY16住の土器だまりと石片集中地点を取りのぞいた後で検出されたのでSB41→Y16住が想定できる。SB35西柱列北から2番目の柱穴出土土器とY16住廃絶後に掘り込まれたと考えられ、Y16住→SB35が想定できる。従って、SB41→Y16住→SB35が想定できる。

他にも切り合い関係は明らかではないが、Y15住とSB32・33・34は重複しているので時間差をもって建てられていることがわかる。

B 竪穴住居址 (図9~図10)

4棟検出されている。

Y15号住居址 方形周溝墓周溝SD12に南部の一部を切られている。平面形は北西-南東に長い楕円形で、約8m×7.5mの規模である。周溝がめぐり、中央ピットがある。中央ピットは灰・炭層があった。主柱穴は深さなどから、P2~P7が想定され、P5とP6の間が広いので、ここに入口が想定される。床全面がかたく叩き締められている。

検出された掘り込みは浅く出土遺物は多くない。

Y16号住居址 方形周溝墓周溝SD13に南端の一部を切られている。東に拡張されているが拡張部には周溝がない。

周溝のある部分は、直径約5mのやや南北に長い楕円形で、やや西にずれて中央ピットがある(P1)。
支柱穴はP2・P3・P5・P6の4本で少ない感がある。

拡張部を含めた規模は直径約6mである。支柱穴はP8・9、P10、P4・11、P12が候補として上げられる。

床は全面が叩き締められているが、周溝内がより硬い。

床面での出土遺物が多く、特に磨製石斧が顕著であり、破損品を含め7点ある。拡張部東隅で完形の甕1点が横位でつぶれた状態で出土している。なお床面ではないが、西端で完形の壺1点と、安山岩石片約10kgが集中して出土している。砥石3点の出土も注目される。

Y17号住居址 調査地南端で検出され、今回検出例では最大規模と考えられるが、一部のみの検出である。推定直径約6.4m。周溝は3重あり、内側の周溝より内側だけが床として叩き締められている。焼土が2カ所で検出されている。ほぼ完形に近く復元された小型の甕が、方形周溝墓周溝SD13に切られる手前の床面上5cmのところで出土している。

Y18号住居址 耕作による削平で壁の立ち上がりは検出されず、周溝の一部と、中央ピット・支柱穴が検出されている。支柱穴はP2・P3・P4・P5の4本である。周溝の平面形はやや隅丸方形に近く、主軸長約4mで小型である。

2) 遺物

A 土器(図19) 図示したものは竪穴住居址出土品を中心としており、出土品の一部である。

壺(1・5・6・11・13)は、沈線をめぐらせ、その間に縄文や櫛描き文を配するものである。5・6は下ぶくれの胴部と細い頸をもつタイプであり、5は胴下半に黒斑がある。

1は口縁部が受け口状となる。

13は口縁部に4条の縦の突帯をもち、その間に平行沈線を配する特異なものである。

甕(3・4・7・12)は、口縁部が短く外反し、胴最大径が上半にあるものである。3・4・12は口縁端部を波状にし、端面に縄文をめぐらす。胴上半部には櫛描きの羽状文・格子目文を配し、3・4・7は刺突文を加えている。12は頸部に廉状文配する。調整で特徴的なことはヘラミガキの多用である。7は内面下半に黒色炭化物が付着している。

鉢(8・9)は、摺り鉢状の鉢で、9は片口鉢である。

10は底に穴があり甑である。

2はミニチュアの鉢である。

これらの土器は中期後半の栗林式のものである。

B 石製品(表4 図22～図23)

石鏃・磨製石斧・砥石・叩き石・浮子がある他、打製石器製作時に出た石片が多量に出土している。

また特にY16号住居址から磨製石斧6点、砥石3点が出土していることが注目される。

1～11は石鏃である。すべて安山岩製の打製石鏃である。2・10・11は未製品である。

12～18は磨製石斧であり、15・18は扁平片刃石斧、他は太型蛤刃石斧である。12は折損後、磨石・叩き石として再利用されている。14も全体がザラついており叩き石としても利用されたかもしれない。16・17は折損品で二次的な火をうけている。

19～21は砥石。19・20はザラザラした砂岩系で、暗茶褐色を呈する。21は黄灰色の軟質の推積岩である。よく使用され磨部は凹んでいる。

22は叩き石。23・24は軽石で浮子として利用されたと考えられる。

C 土製品（表 図8）

紡錘車・およびその未製品が7点ある。いずれも壺・甕などの破片を利用して作られている。なお、4は未製品であるが、5・7は穿孔痕がなく紡錘車と断定できない。

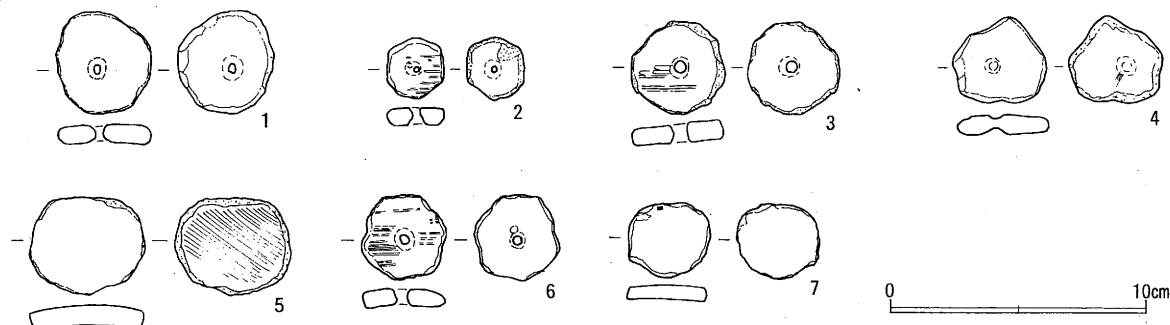


図8 弥生時代の紡錘車 1 : 3

3 古墳時代

1) 遺構

A 方形周溝墓（表 図15～図16）

方形周溝墓周溝が3基検出された。上野遺跡でこれまでに検出された方形周溝墓は表のとおりで合計12基ある。そのうちの10基は今回調査地周辺にある。しかし溝を共有あるいは接しているものではなく、数メートルを隔てて規則的に配されている。

今回検出されたSD11～13のうちSD11・12は比較的小規模な部類であり、SD13は比較的大規模な部類である。またSD13は他の例と比較して溝幅が広い。

いずれも周溝の底面は平らではなく、微妙な凹凸があり、10～20cmくらいの段が所々にみられる。

主体部は残念ながら残っていない。溝内の出土遺物ごく少ない。

B 竪穴住居址（図14）

壁の立ち上がりが明瞭ではなく、プランもはっきりしないし、支柱穴・周溝がなく、明らかな床もないという点で竪穴住居址とするには根拠がとぼしいが、黒色土を精査中に輪郭があいまいながら確認できたこと、北半分を中心に完形に近く復元できた土器がまとまって出土していることを理由に、竪穴住居址H36号住居址と命名しておいた。

検出部分では、南北約5.0 m、東西約4.0 mの楕円形プランで、壁は斜め上方に立ち上がり、深さは検出面から約7 cm。

遺物は調査地北壁に接する床上から完形に近く復元された甕（図 15～17）が、中央床上約10cmのところから高坏脚（同20）が、南西よりの床上約10cmのところから完形に近く復元された壺（同14）が出土している。また、遺存状態が悪く復元・図示しえなかった甕約1個体分が中央北寄りから出土している。

2) 遺物

A 土器

(1) H36号住居址出土土器（図20-1～20）

14は、短く外反する口縁部と倒卵形の胴部をもち平底の壺である。完形に近く復元できた。図はなるべく左右のひずみが少ない所で描いてあるのでいびつな感がないが、実物はかなりいびつな感がある。調整は口縁部内、外面ヨコナデ、胴部外面ハケ、同内面にケズリを施す。胴内面には粘土紐輪積み痕が残る。胴外面のハケは上半は上から下へ、下半は下から上へ施される。胎土に砂を多く含み器壁はザラついている。壺だが外面の一部に煤が付いている。

15は、短く外反し端面をもつ口縁部と、倒卵形の胴部をもち、小さな平底の甕である。全体のプロポーションは、幾内の「庄内甕」とよく似ている。口縁部内外面はヨコナデされるが、皮や布等を用いるのか横の線が目立ち、特に端面は擬凹線のようにも見える。胴外面はハケ、内面は上半が粗いミガキ、下半はケズリ。底部外面と胴の底部近くの一部にもケズリが施されている。ほぼ完形に復元できた。胎土に砂を多く含む。外面に煤が付く。

16は15より胴部が球形に近い小型の甕である。口縁部は15とよく似ており、端面に擬凹線を施したようにみえるヨコナデを行っている。小さな平底がつくと思われる。約55%残存。胎土に砂を多く含む。外面に煤が付く。

17は、いわゆる月影式の二重口縁の系譜を引く甕である。胴部の形は16によく似ているが16より底部の丸みが少ない。胎土に砂を多く含む。二次焼成をうけたためか赤橙色をしている。

18・19は、器台、20は高坏ないし器台の脚である。18は赤橙色を呈し精製品の感がある。19・20は外面ミガキ、内面にケズリを施す。19は砂を多く含みザラついている。20は4カ所の透かし穴をもつ。

(2) SD11・SD13出土土器 (図 20-21~25)

方形周溝墓周溝出土品である。

21は壺で、口縁部内、外面にもハケを施す。壺であるが外面に煤が付く。

22・23は甕口縁部で、いずれも口縁外面に折り返した粘土の痕跡がよく残る。24は二重口縁の甕である。

25は小型の壺で、外面はよくミガかされている。

(3) 古墳時代の土器の特色

今回出土品を含めて、上野遺跡出土の古墳時代土器にはいくつかの特色がある。

ひとつは、完形ないしそれに近く復元できたものにいびつなものが多いことだ。これは平底から丸底への変化や、内面ヘラケズリの多用による器壁の薄さにも起因しようが、赤彩や櫛描き波状文に特色づけられる弥生時代後期の箱清水式土器と比べると、土器製作の意識の変化—粗雑化・簡略化・合理化—があったように思う。

二つめは、胎土に砂を多く含み、器壁がザラつく感のある土器が多くなることである。このことは外来系の土器に限らず、存地の箱清水式の系譜を引くものでも砂の多含が指摘できる。ヘラミガキ調整の減少も一因であろうが、素地を作る技術の変化があったと考えられる。

三つめは、北陸系の土器がほとんどを占めることである。今回出土品も北陸の漆町編の5~6群土器に比定され、幾内庄内式の新しい段階と考えている。ほぼ同じ年代に比定される飯山市内柳町遺跡では、存地の箱清水式の系譜を引く土器群が半数以上を占めている。両遺跡は直線距離にして約2kmしか離れていない。上野遺跡では1989(平成元)年の調査で能登・加賀に類例のある特異な住居址(H9号住居址)が検出されていることを含め、注意されることである。

注1 田嶋明人 1986「考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

注2 『上野Ⅷ・柳町遺跡』1996 飯山市教育委員会

注3 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書』1990 飯山市教育委員会

4 平安時代

1) 遺構

A 竪穴住居址 (図17)

H37号住居址 E・F-14区にあり、方形周溝墓周溝SD11を切っている。東部を攪乱溝に切られる。隅丸方形プランの小型の住居址で規模は3.6m×3.1m。約11.2㎡、畳約6畳分である。支柱穴を壁ぎわにもつタイプでP2・P3・P6があたり、P6の東にもう1本あったものと推定される。また、P1・P4も支柱穴である。床は全体に叩き締められている。東南隅に焼床と焼土があり、隣接するP5から甕が出土している。また焼けた角石が覆土中から数点出土しているので、東南隅に石で構築されたカマドがあったものと推定される。カマドの石は廃棄時に持ち去られたのだろう。

B 土坑 (図18)

形状が似ているので3基の土坑を平安時代のものとしておいたが、SK175以外は確たる根拠がない。SK173 C-13区にある。隅丸長方形プランの土坑で主軸を東西にとる。規模は1.6m×0.7m。深さ0.2m。出土遺物はない。

SK174 C-15区にある。隅丸長方形プランの土坑で主軸を南北にとる。規模は約1.8m×1.2m。深さ0.2m。出土遺物はない。

SK175 I-16区にある。隅丸長方形プランの土坑で主軸を東西にとる。規模は2.4m×1.1m。深さ0.35m。上記2土坑より平面形・掘り込みがシャープである。中央北壁ぞいから黒色土器坏1、灰釉陶器坏1、椀1が正位で出土している。墓坑と考えられる。

2) 遺物

A 土器・陶器 (図21)

(1) H37号住居址出土土器

26~30は黒色土器坏である。いずれも体部の立ち上がりが高く内湾ぎみであり、底部調整はロクロケズリまたはヘラケズリで、当遺跡では古い一群である。

31は高台付の黒色土器椀である。

32~34は甕である。ロクロ成形され、33はロクロによるハケが施されている。胴下半は32・33がヘラケズリ、34は板ナデ状の調整がなされている。

(2) SK175 出土土器・陶器

35は黒色土器坏。体部が内湾ぎみに立ち上がり深い。底部はロクロケズリ。完形品。

36は灰釉陶器坏。完形品でややいびつ。灰釉はハケ塗り。素地は砂を含まず灰白色。底部外面はロクロナデされる。

37 灰釉陶器皿。完形品。灰釉は潰けがけで、見込みに重ね焼き痕がある。素地は細砂を含み淡灰色を呈する。

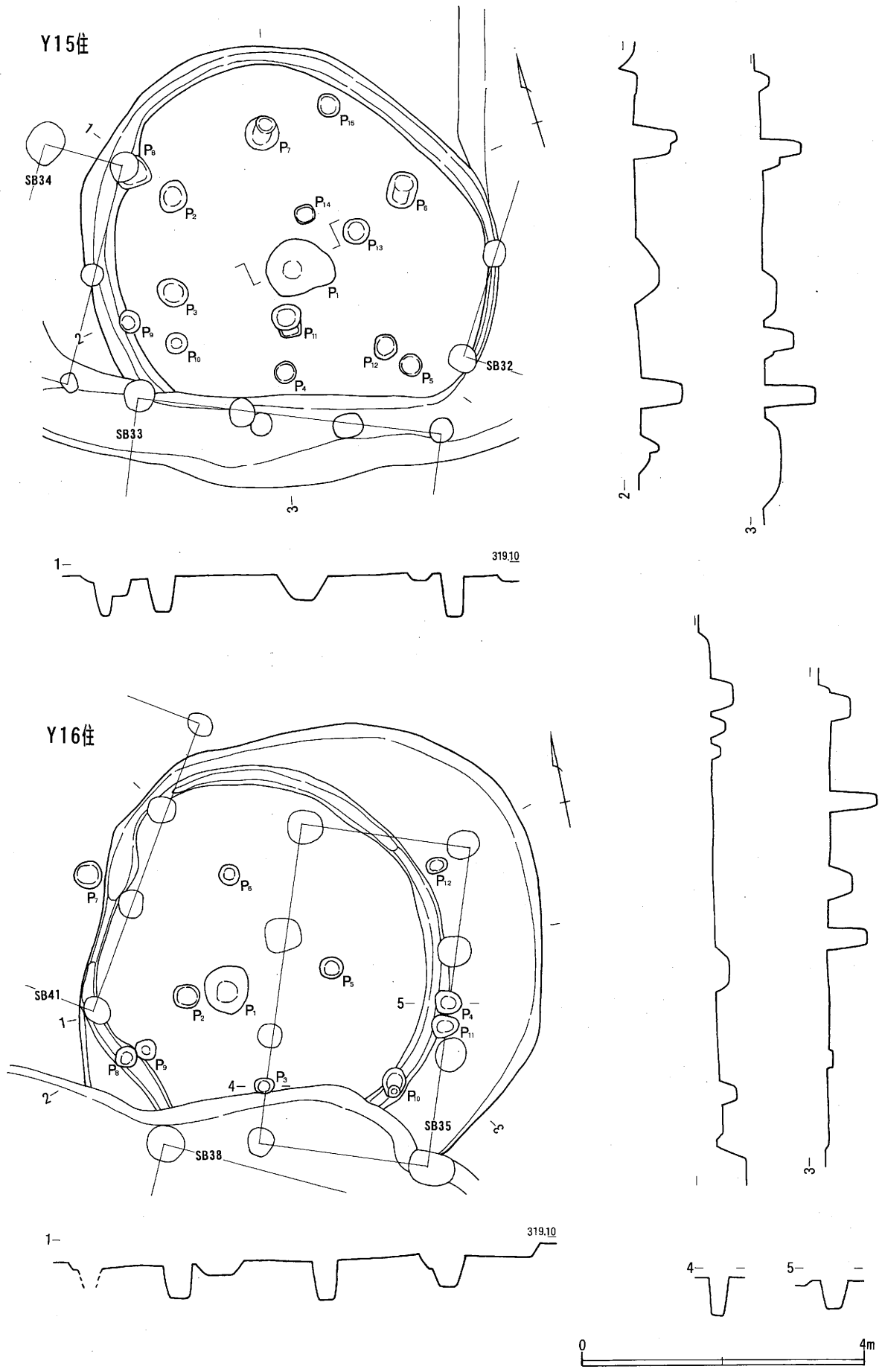


図9 弥生時代の竪穴住居址 1 : 80 (1)

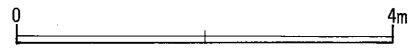
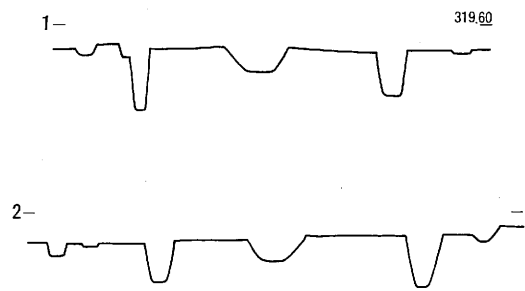
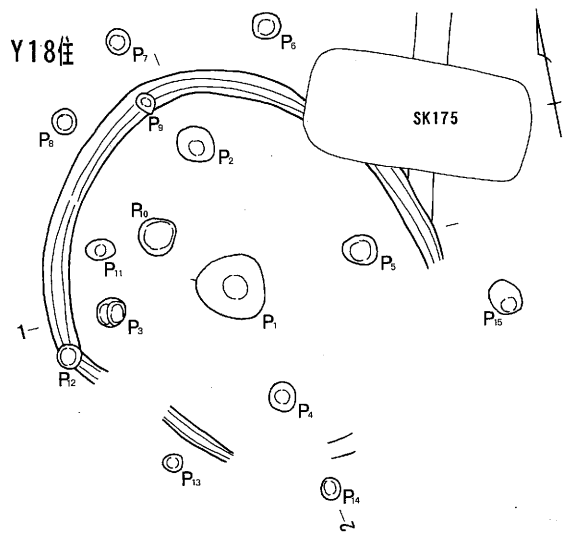
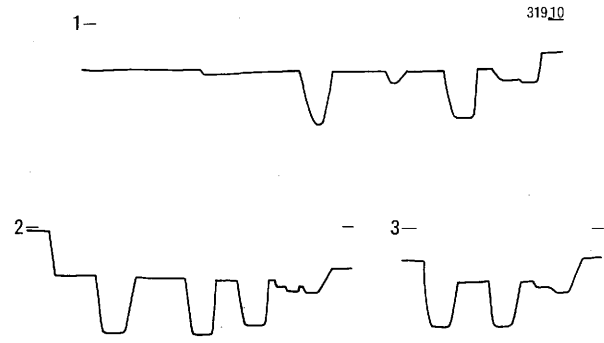
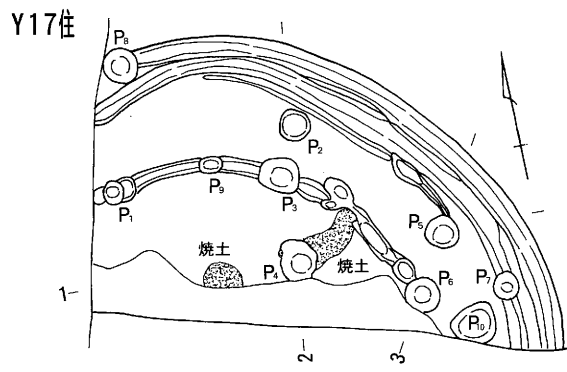
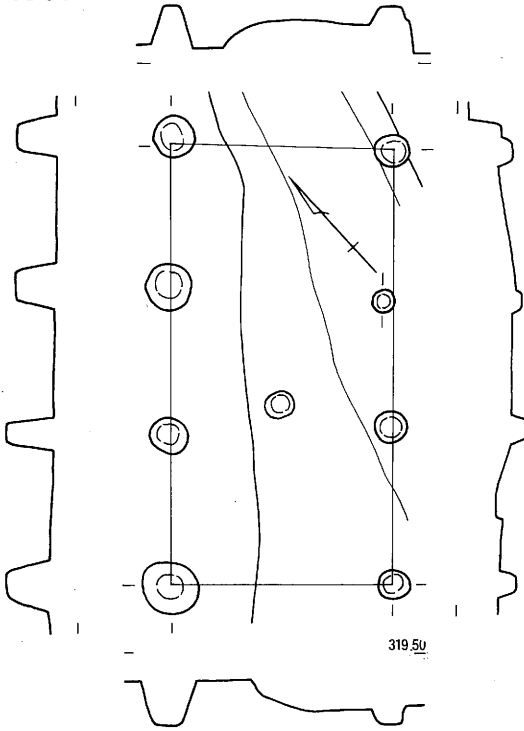
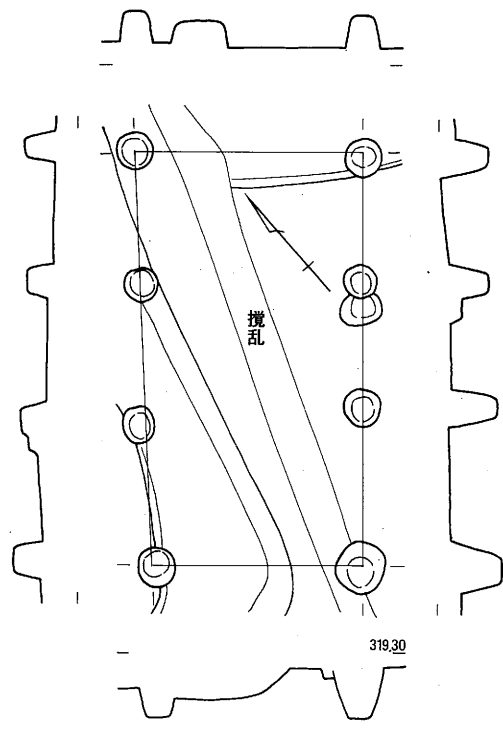


図10 弥生時代の竪穴住居址 1 : 80 (2)

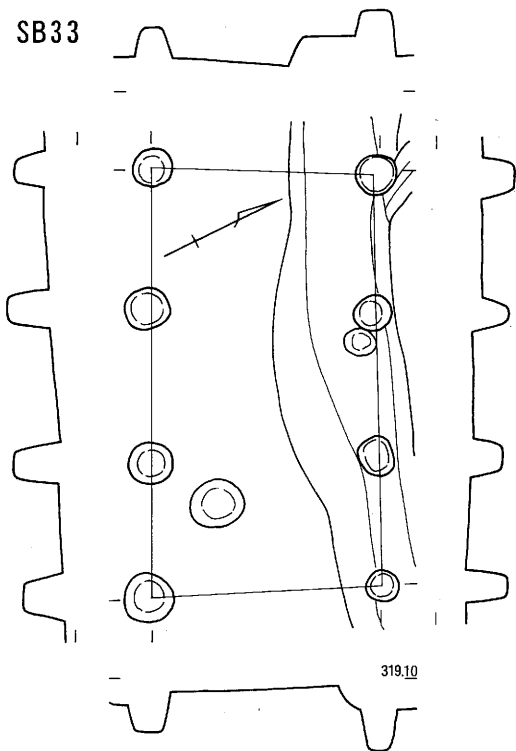
SB31



SB32



SB33



SB34

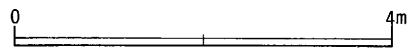
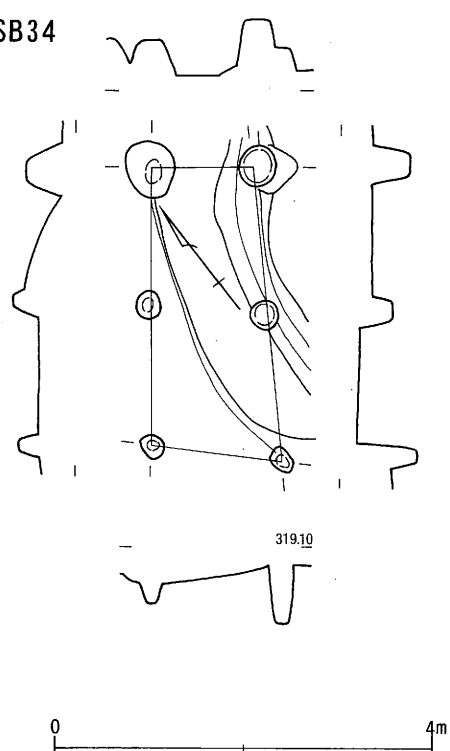
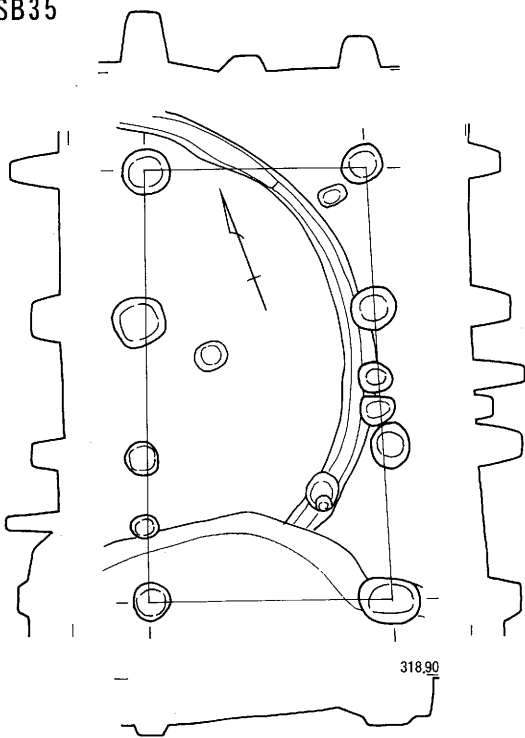
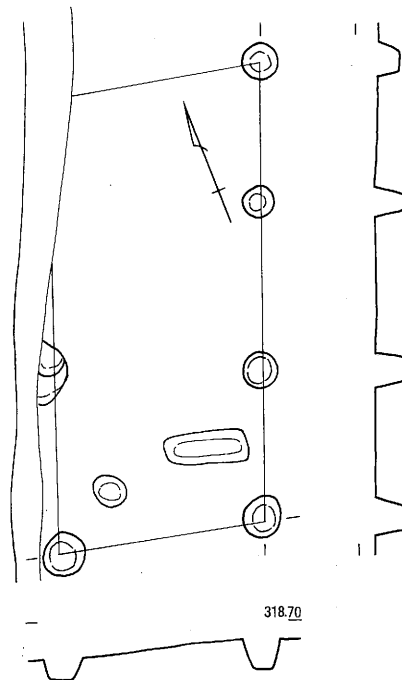


図11 弥生時代の掘立柱建物址 1 : 80 (1)

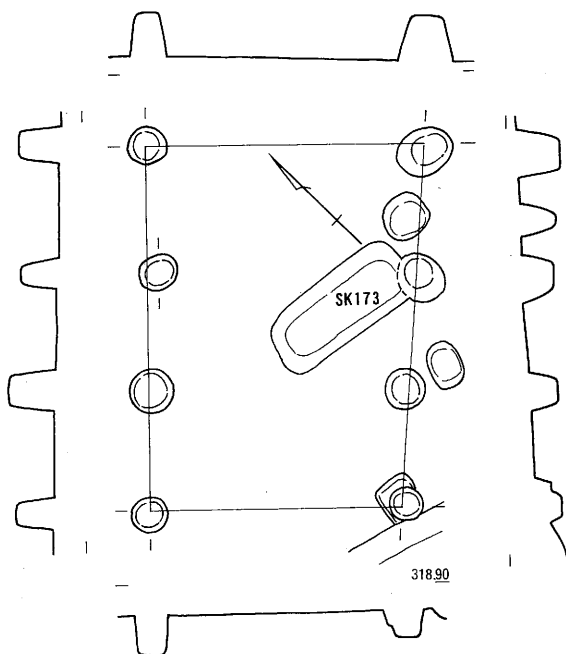
SB35



SB36



SB37



SB38

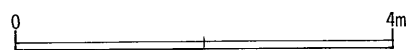
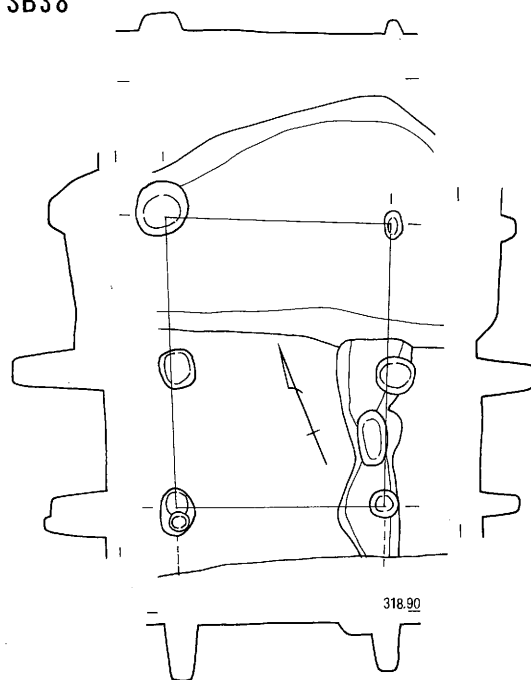
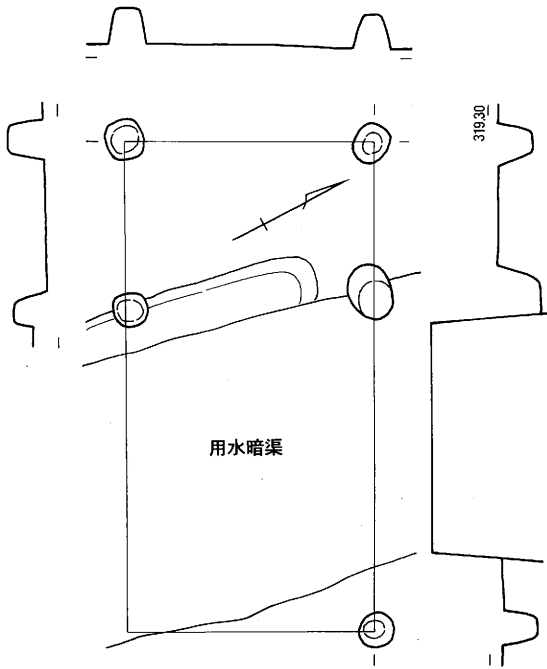
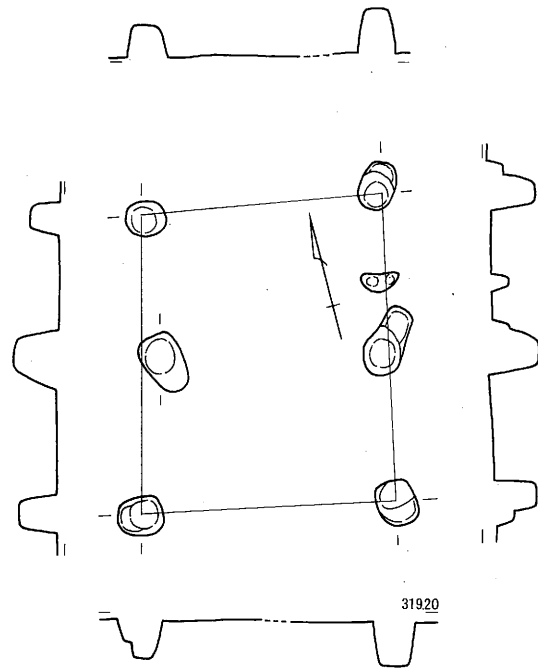


図 12 弥生時代の掘立柱建物址 1 : 80 (2)

SB39



SB40



SB41

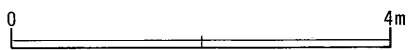
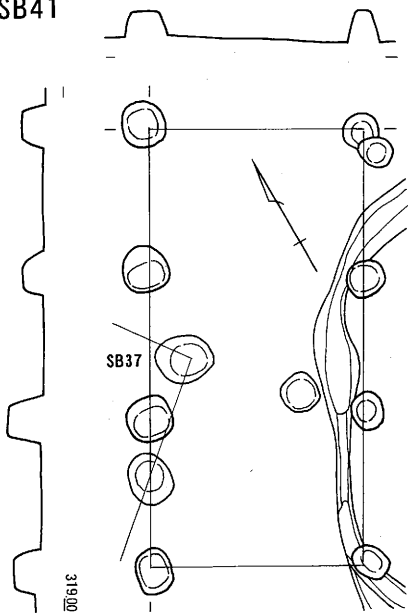


図 13 弥生時代の掘立柱建物址 1 : 80 (3)

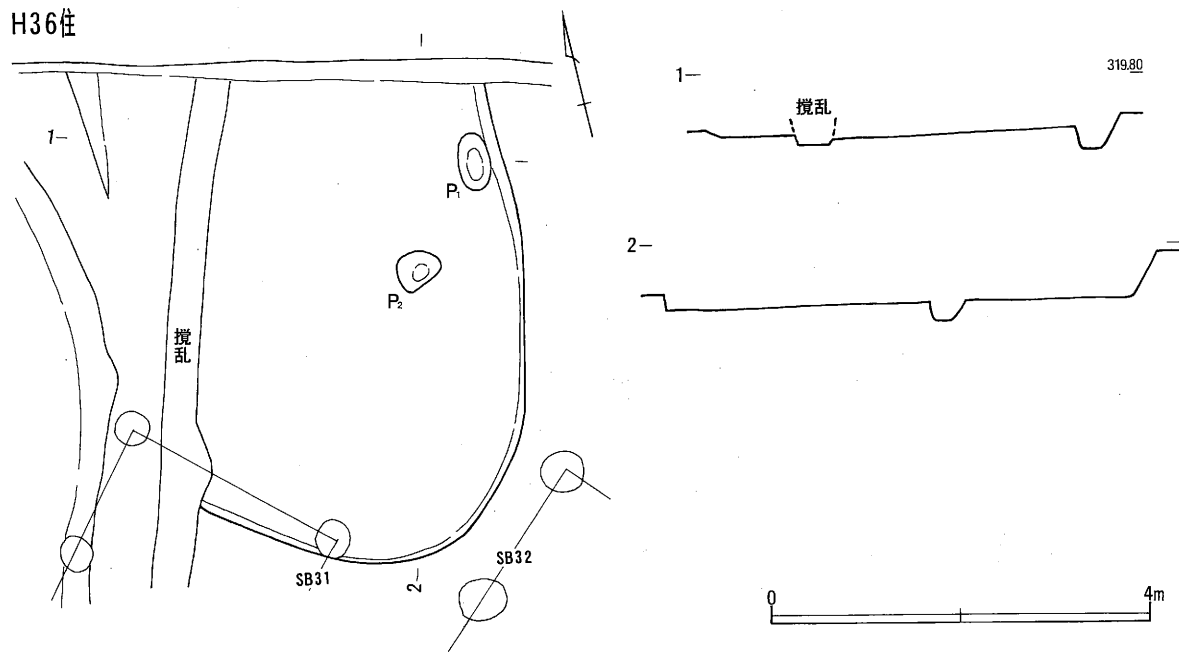


図 14 古墳時代の竪穴住居址 (1 : 40)

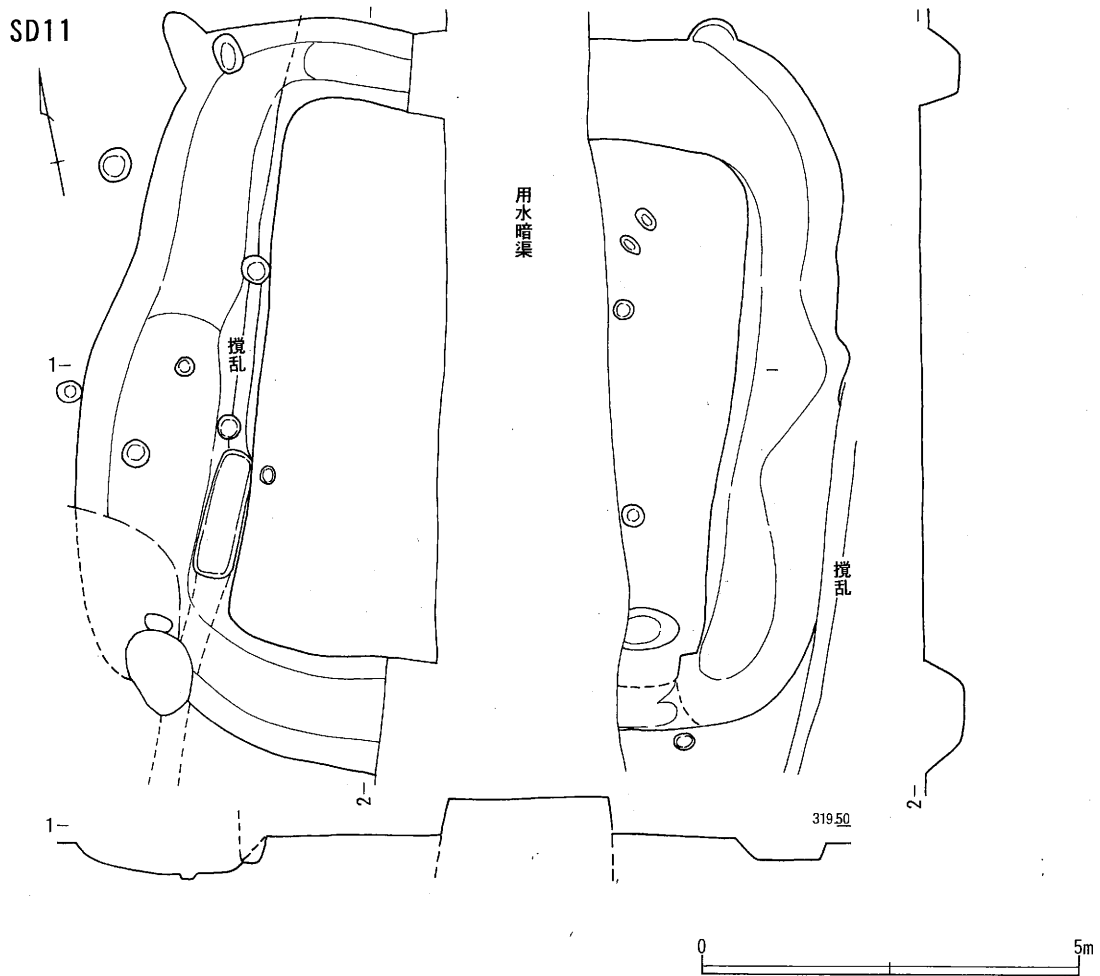
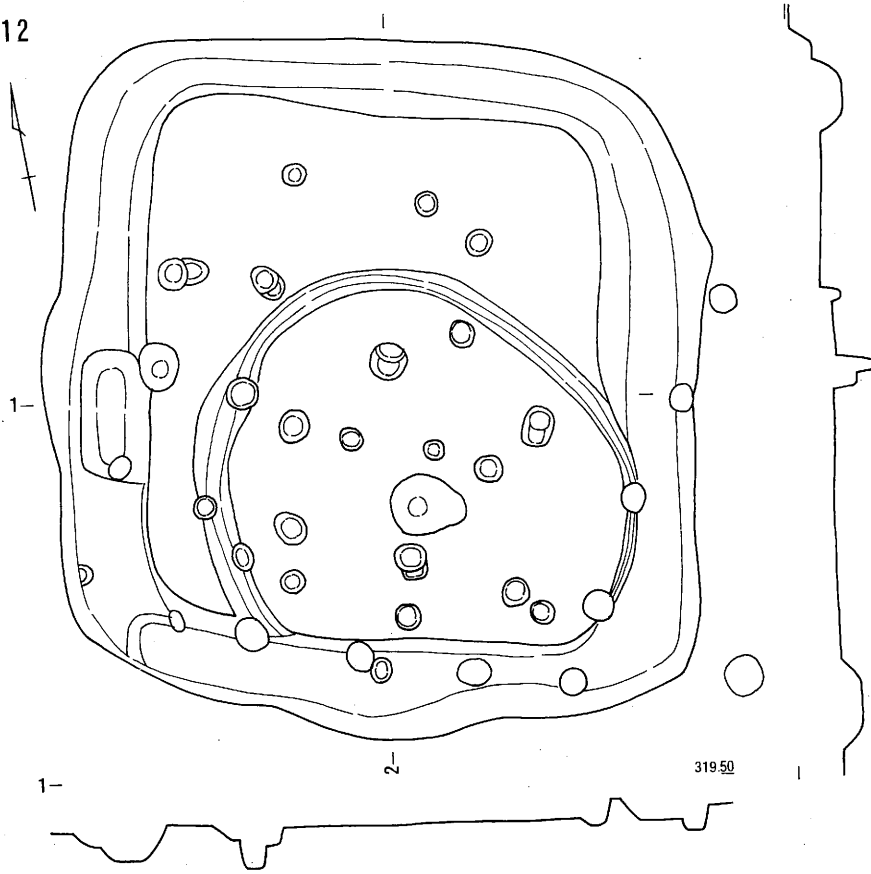


図 15 古墳時代の方形周溝墓 1 : 100 (1)

SD12



SD13

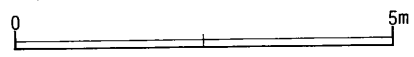
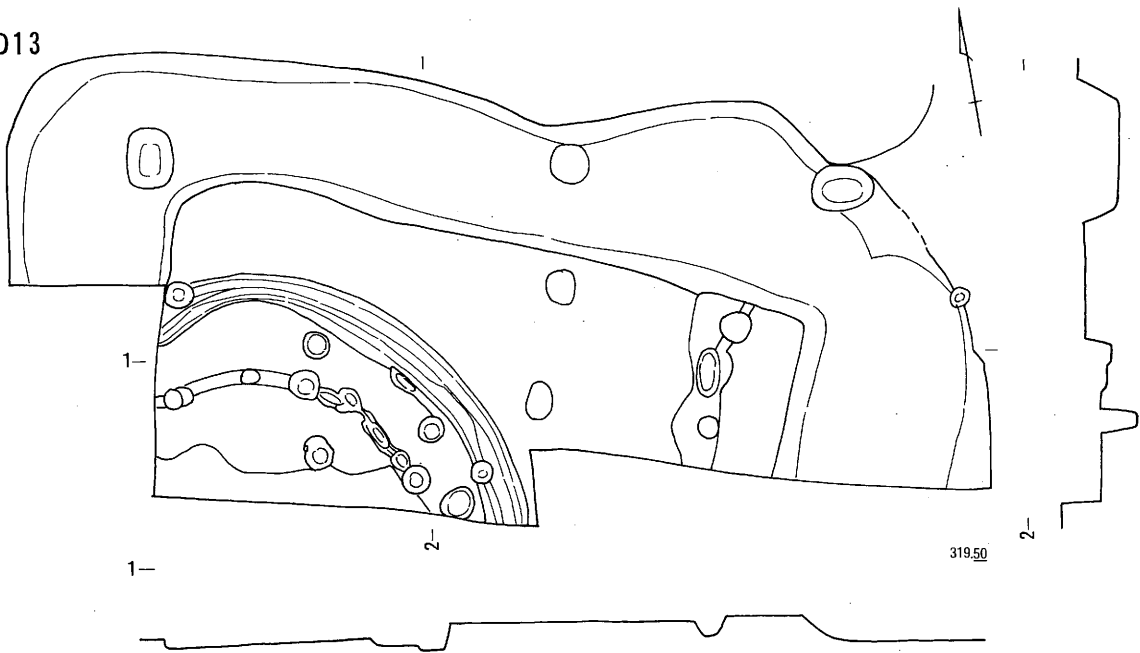


図16 古墳時代の方形周溝墓 1 : 100 (2)

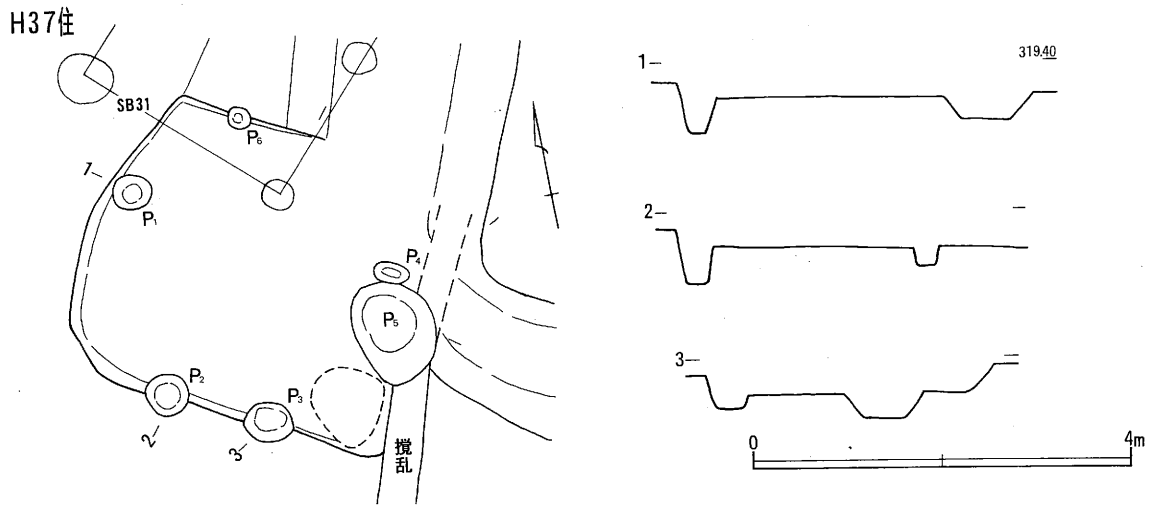


図17 平安時代の竪穴住居址 (1 : 40)

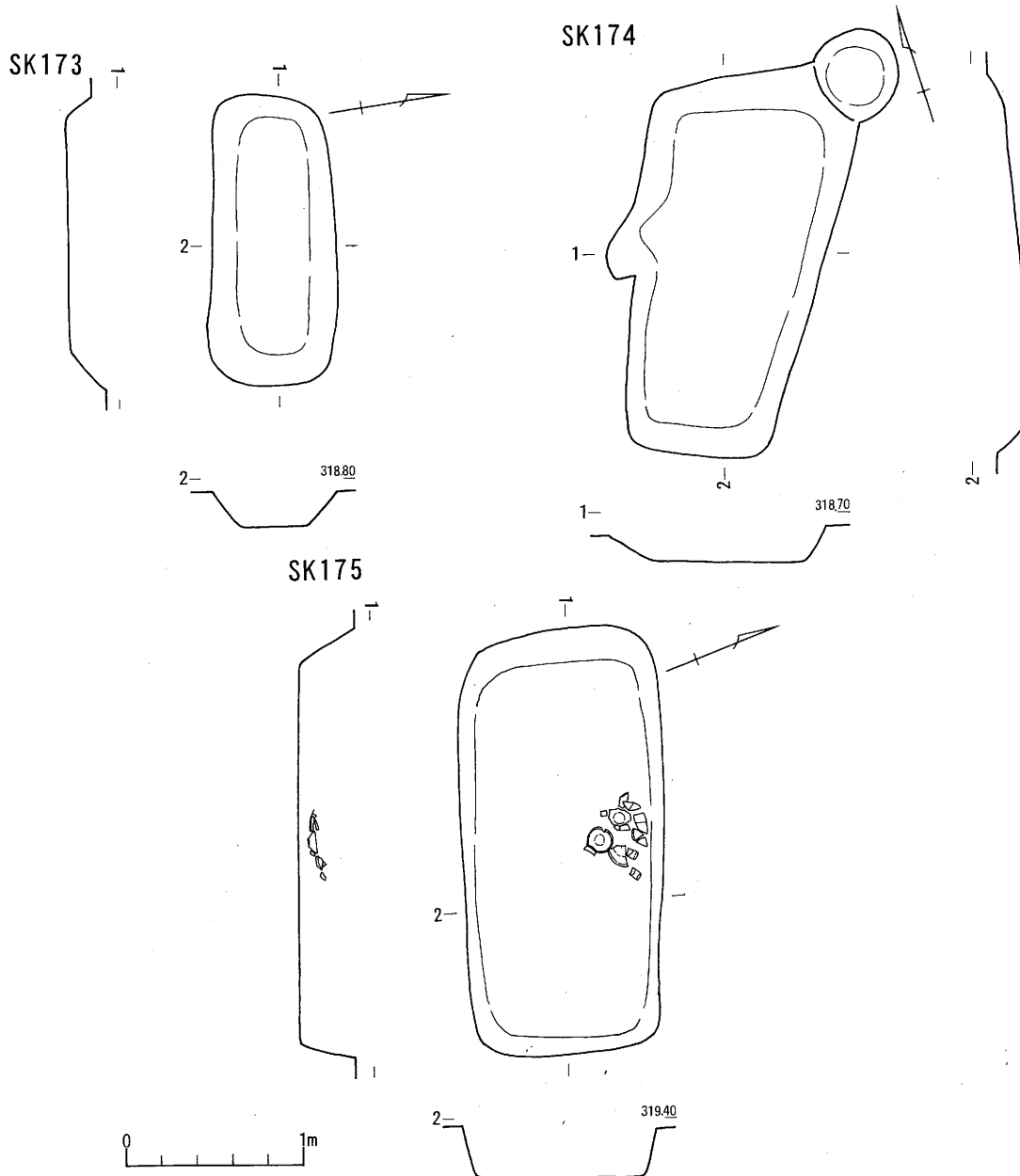


図18 平安時代の竪穴住居址 1 : 80

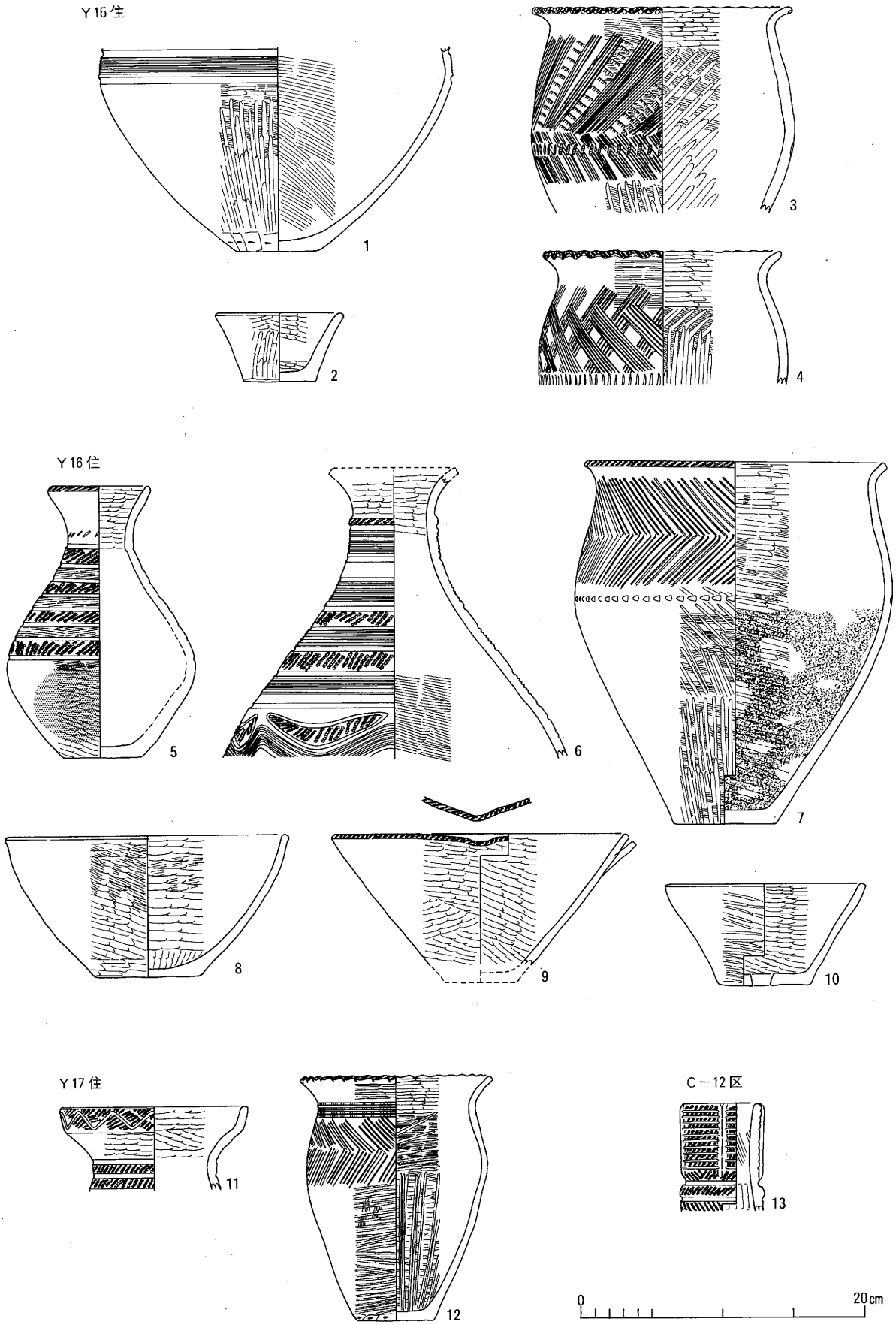


図19 弥生時代の土器（1：4）

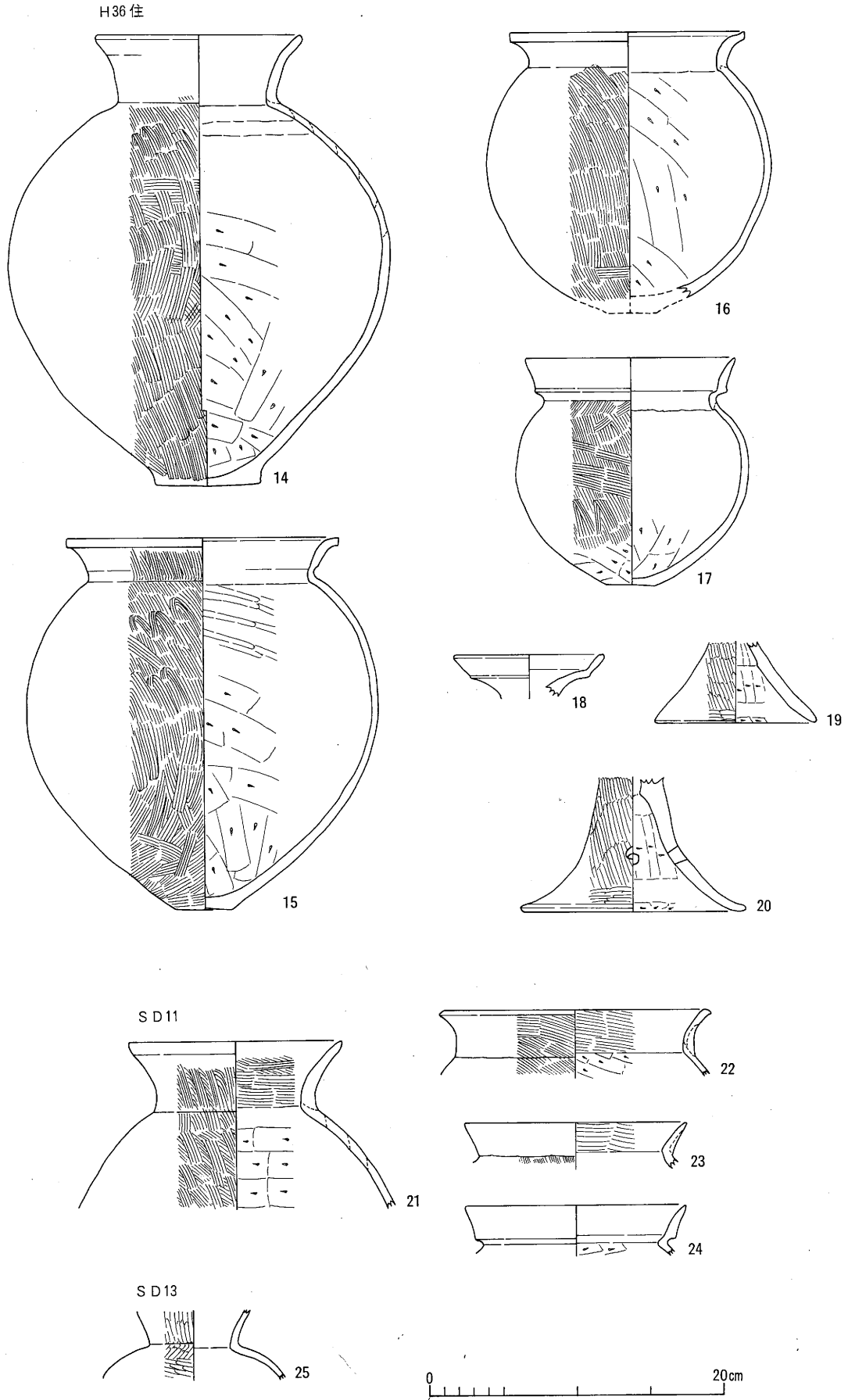


図 20 古墳時代の土器（1 : 4）

H37住

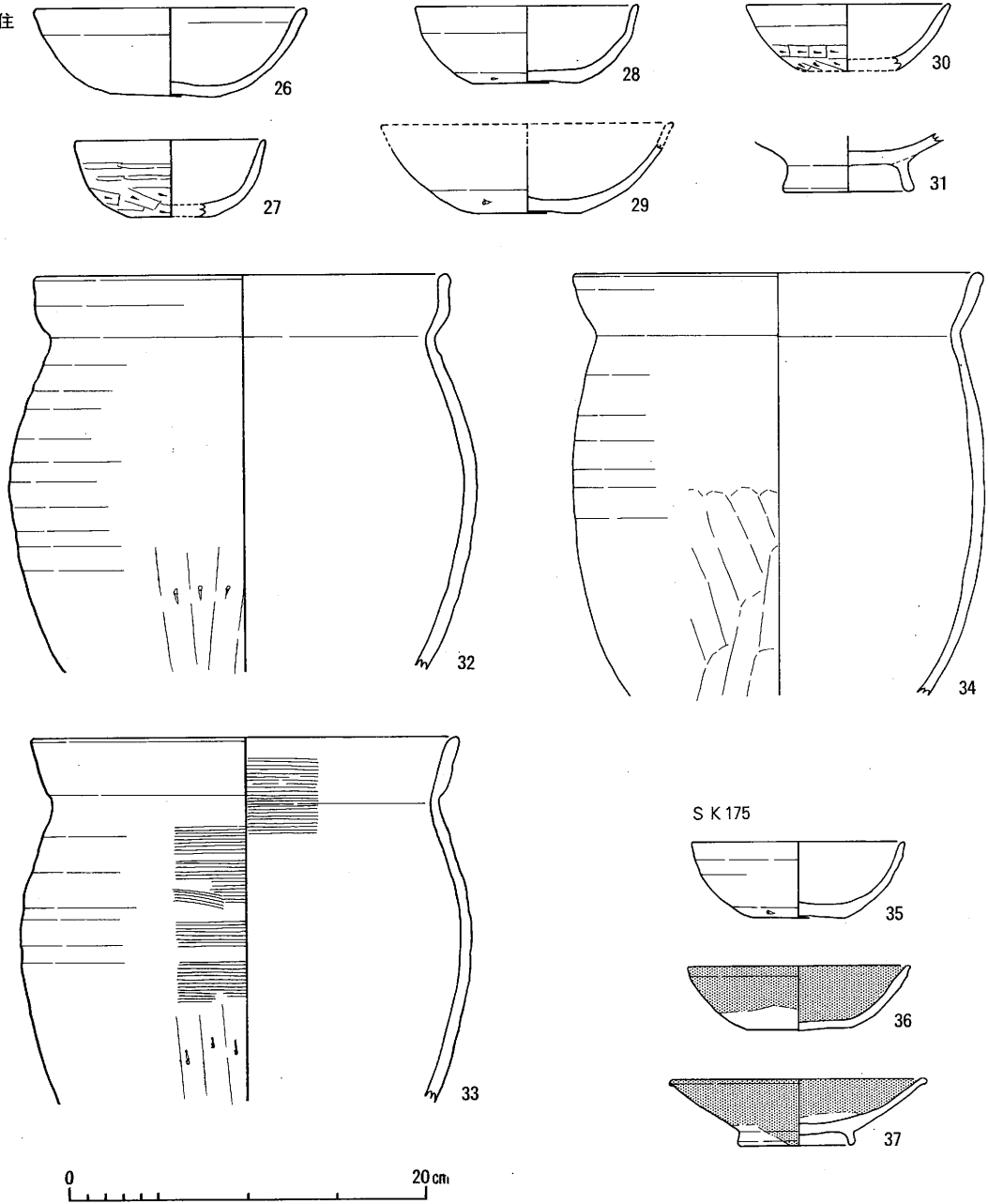
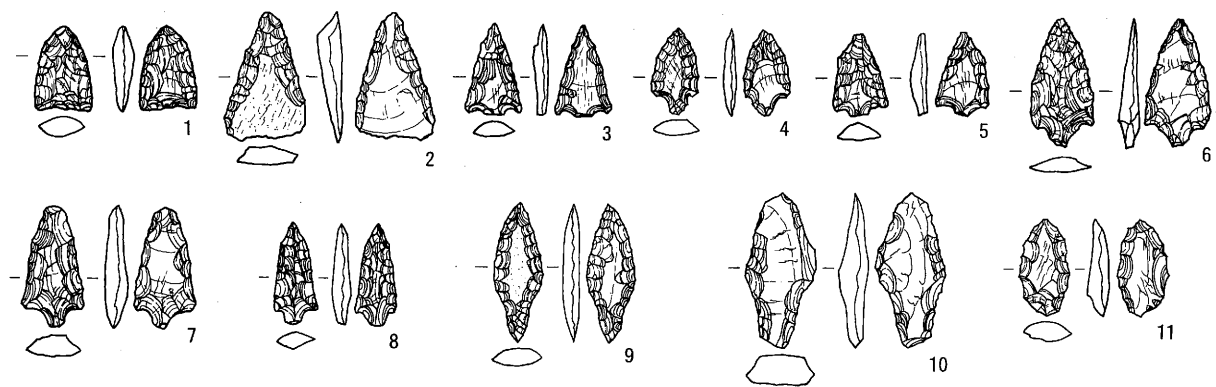
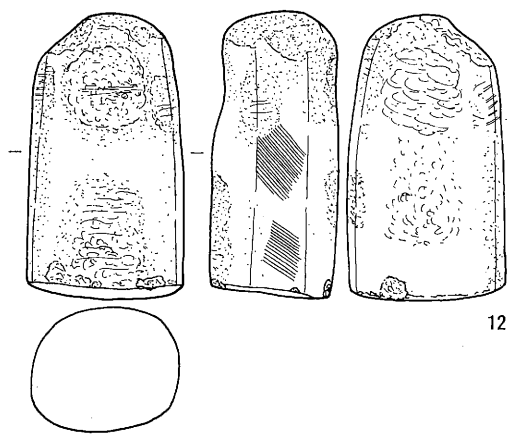


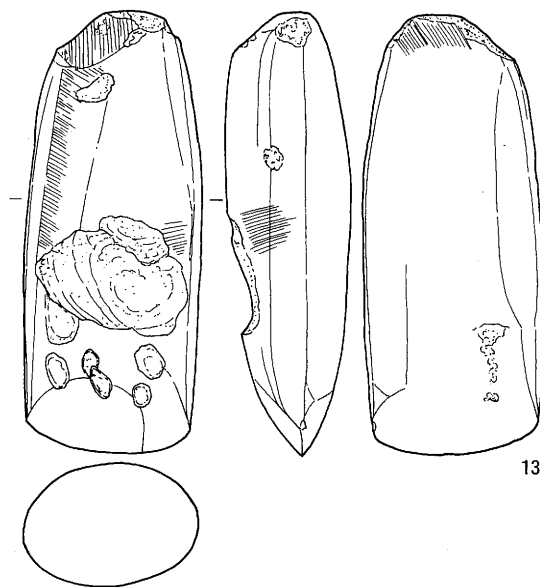
図21 平安時代の土器・陶器 (1:4)



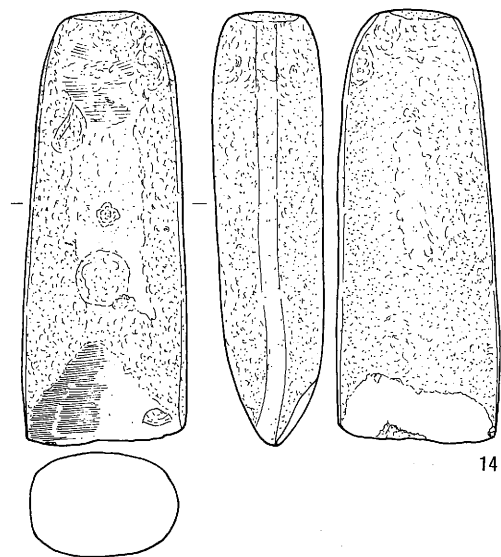
0 10cm



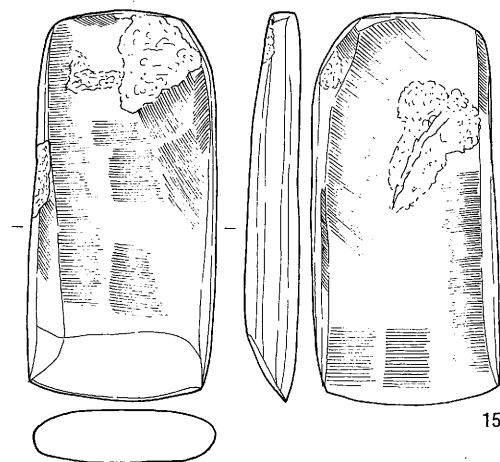
12



13



14



15

0 10cm

図22 弥生時代の石器 1 : 2 1 : 3 (1)

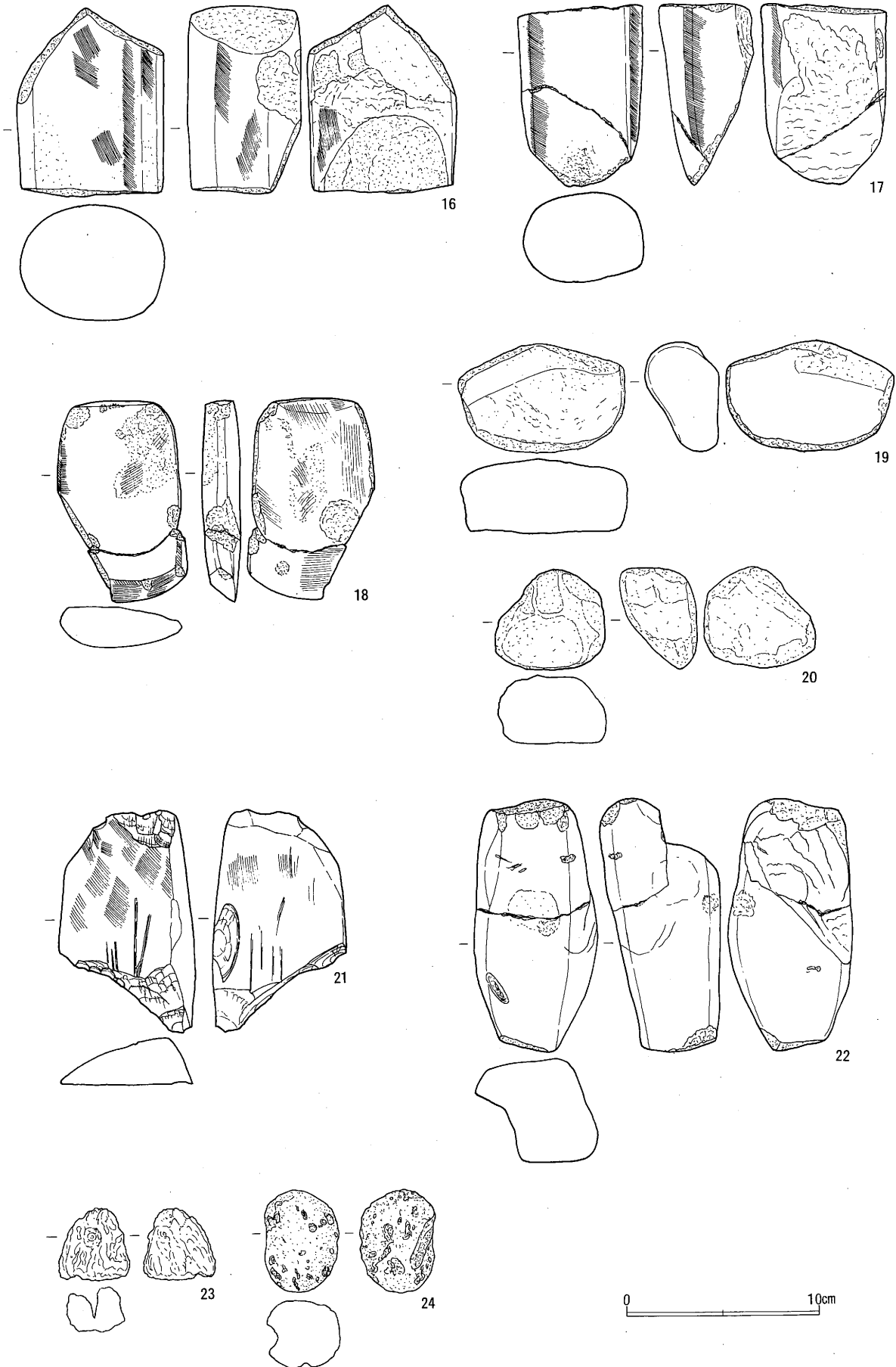


図 23 弥生時代の石器 1 : 3 (2)

表1 掘立柱建物址一覧

番号	位置	方位	規模 (m)			母屋面積 (m ²)	備考
			桁行	梁行	柱穴直径		
SB31	E・F-15	N41° E	3間 4.7	1間 2.3	0.12~0.6	10.8	
SB32	D・E-15	N41° E	3間 4.4	1間 2.3	0.38~0.52	10.1	Y15号住居址と重複
SB33	C・D-14・15	N64° W	3間 4.4	1間 2.4	0.36~0.52	10.6	〃
SB34	C-15	N32° E	2間 2.9~3.1	1間 1.1~1.4	0.28~0.54	3.7	〃
SB35	D・E-13	N20° E	3間 4.6	1間 2.5	0.38~0.68	11.5	Y16号住居址を切る
SB36	B-15	N21° E	3間 4.8	1間 2.2	0.34~0.46	10.6	
SB37	C-13・14	N49° E	3間 3.84	1間 2.64~3.0	0.36~0.62	10.9	
SB38	D-12・13	N24° E	3間 —	1間 2.4	0.2~0.56	—	
SB39	F-13	N61° W	3間 5.18	1間 2.64	0.38~0.42	13.7	
SB40	H・I-13・14	N12° E	3間 —	1間 2.6	0.4~0.64	—	
SB41	C・D-13・14	N20° E	3間 4.6	1間 2.3	0.3~0.5	10.6	Y16号住居址に切られる

表2 上野遺跡方形周溝墓一覧

名 称	遺構番号	南北 外法 内法 m	東西 外法 内法 m	備 考
1号方形周溝墓	SD1	9.4 6.5	— 6.8	
2号 〃	SD2	8.2 6.0	7.6 5.5	浅い 南辺から単純口縁壺
3号 〃	SD3	12.8 10.2	13.1 10.1	
4号 〃	SD5	— —	15.2 11.7	大倉崎館下層 北辺から2重口縁壺出土
5号 〃	SD4	(10.4) —	— —	南北に長い楕円形か
6号 〃	SD7	— —	11.3 8.0	
7号 〃	SD8	14.0 9.8	13.4 10.0	北辺から小型甕 南辺から小型台付鉢
8号 〃	SD9	11.8 8.5	— —	北辺に溝内墓壇 溝内墓壇から赤彩台付鉢
9号 〃	SD10	— —	12.8 9.1	楕円に近いプランか 浅い
10号 〃	SD11	9.8 6.5	10.0 7.1	
11号 〃	SD12	9.2 7.0	8.5 6.1	
12号 〃	SD13	— —	13.4 8.4	溝幅が広い

表3 土器・陶器観察表（甕をのぞく）

出土地	番号	器種	器形	法量			底調整	備考
				口径	器高	底径		
H 37号住居址	26	黒色土器	坏	15.2	5.0	5.6	ヘラケズリ	
	27	〃	〃	10.8	4.3	4.6	〃	
	28	〃	〃	12.6	4.4	5.8	ロクロケズリ	
	29	〃	〃	—	—	6.0	〃	
	30	〃	〃	11.6	4.2	5.4	ヘラケズリ	
	31	〃	椀	—	—	7.4	ロクロナデ	
S K 175	35	〃	坏	12.0	4.3	5.2	ロクロケズリ	完形品
	36	灰釉陶器	坏	12.5	3.6	5.8	ロクロナデ	〃
	37	〃	皿	14.6	3.8	6.8	ロクロナデ	〃

表4 石器・石製品一覧

No.	種類	出土地点	長さ cm	重さ g	材質	備考
1	石鏃	S D13	2.3	1.8	安山岩	
2	石鏃	Y16住	3.4	3.3	〃	未製品
3	石鏃	D15	2.4	1.2	〃	
4	石鏃	Y16住	2.3	1.1	〃	
5	石鏃	S D13	2.2	1.3	〃	
6	石鏃	S D12	3.5	2.3	〃	
7	石鏃	Y16	3.3	2.8	〃	
8	石鏃	Y16住	2.7	1.2	〃	
9	石鏃	Y16住	3.7	2.0	〃	
10	石鏃	Y15住	4.1	5.4	〃	未製品
11	石鏃	Y17住	2.5	1.9	〃	未製品
12	磨製石斧	Y15住	11.3	685.5	蛇紋岩系	折損 再利用
13	磨製石斧	Y16住	17.3	942.2	〃	
14	磨製石斧	Y16住	17	835.2	〃	前面打痕
15	磨製石斧	Y16住	15.3	459.8	〃	
16	磨製石斧	Y16住	9.8	760.6	〃	二次火をうける
17	磨製石斧	Y16住	9.4	412.8	〃	
18	磨製石斧	Y16住	10.4	220.2	〃	
19	砥石	Y16住	5.6	175.3	砂岩系	粗砥
20	砥石	Y16住	5.3	94.3	〃	〃
21	砥石	Y16住	7.7	175.8	軟質砂岩	仕上げ砥
22	たたき石	B13	13.2	609.7	安山岩系	
23	浮子	S B35 P 1	3.3	6.8	軽石	
24	浮子	Y17住	5.3	18.3	〃	

表5 土製品一覧

No.	出土地	重量 g	備考
1	Y16住	12.5	
2	Y17住	4.3	
3	Y17住	11.6	
4	M36住	9.5	未製品
5	S D11	16.7	穿孔なし
6	D12	8.7	
7	F14	7.0	穿孔なし

N おわりに

平成10年3月末になって具体化した上野遺跡における開発行為は、埋蔵文化財の保護を行なう市教育委員会としては、文字通り緊急発掘となった。

幸いにも事業主の深いご理解をいただいて、事前の調査を行なうこととなった。調査地は、上野遺跡全体とすれば南端にあたるが、周囲の過去の調査からすればもっとも濃密に遺構の存在する場所でもあった。

特に平成7年に実施した北隣接地の調査では、旧石器時代石器群、弥生時代竪穴住居址、礫床木棺墓、古墳時代方形周溝墓などが検出され、その遺構の続きがあるものと想定されていた。

実際の調査結果では、弥生時代礫床木棺墓の存在はつかめなかったが、弥生時代住居址、同掘建柱建物址、古墳時代方形周溝墓、平安時代竪穴住居址、同土坑墓など、全面に密集して遺構が検出された。期限や残土処理の問題もあって、完璧な調査を実施し得たとは言いがたいが、ほぼ遺構は明らかにしたものと考えている。

上野遺跡は、十万平方メートルにも及ぶ大複合遺跡であるが、昭和63年の調査来ほぼ毎年の緊急発掘調査で、確実に遺跡は失われてきている。大きな発掘成果もあったことは事実であるが、このまま失われていってよいのかという疑問も付きまとうのが偽らざる気持ちでもある。

本調査にご協力いただいた施主の由科学氏、北野建設、地元上野区、そして調査の実際にあたられた作業員の皆様に感謝申し上げて稿を閉じたい。

写真図版



調査地区全景（東より）



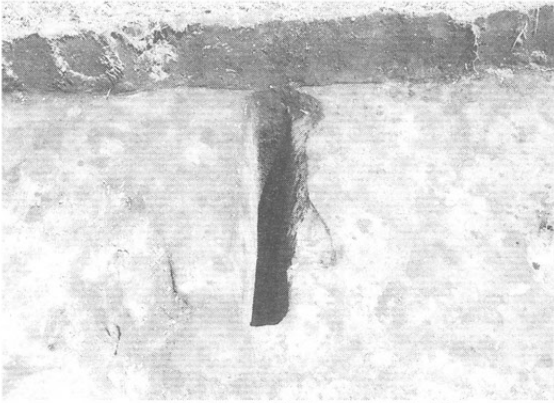
調査区遺構全景



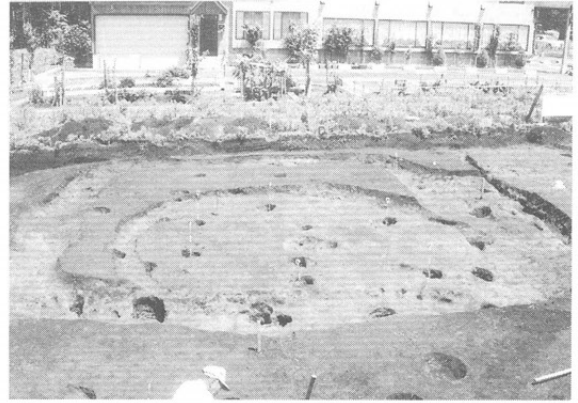
作業風景



現地見学会（平成10年5月27日）



S K 176 (縄文時代落とし穴遺構)



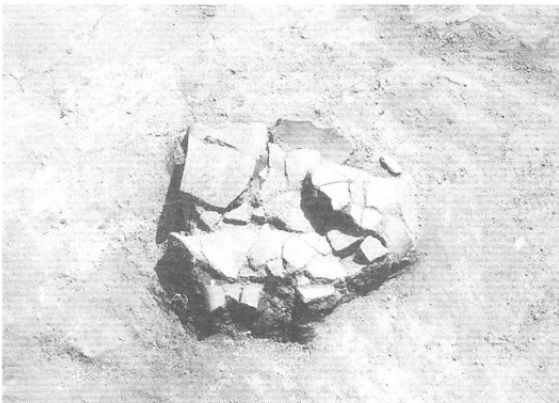
Y 15 号竪穴住居址および S D 12



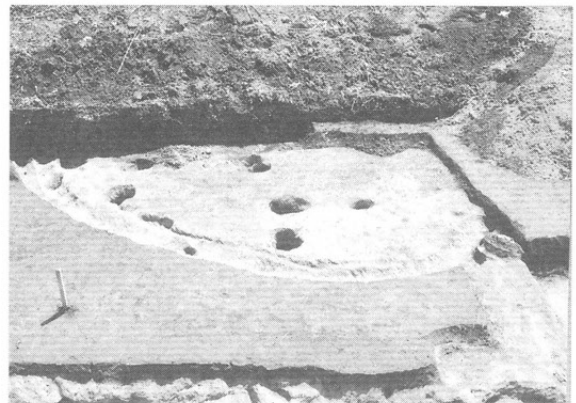
Y 16 号竪穴住居址



Y 16 住内出土壺形土器および石器



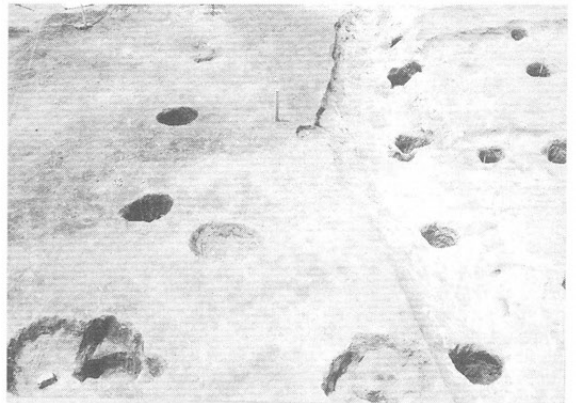
Y 16 住内出土甕形土器



Y 17 号竪穴住居址



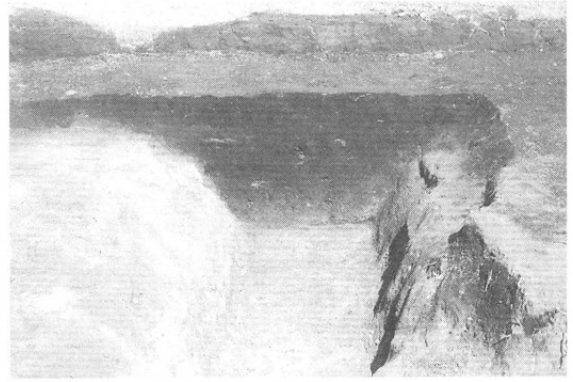
Y 18 号竪穴住居址



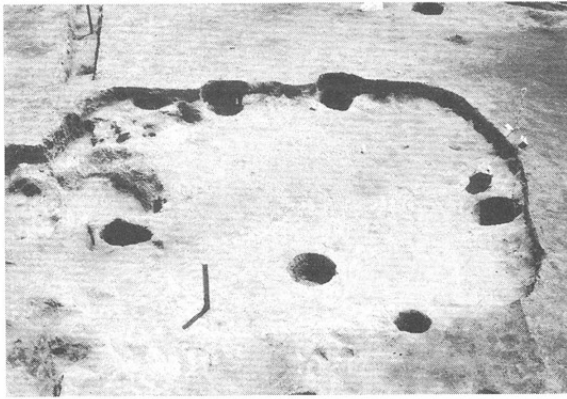
33 号掘建柱建物址 (S B 33)



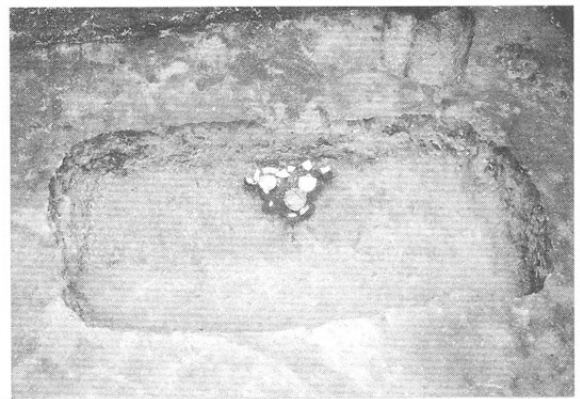
H36 号竖穴住居址（古墳時代）



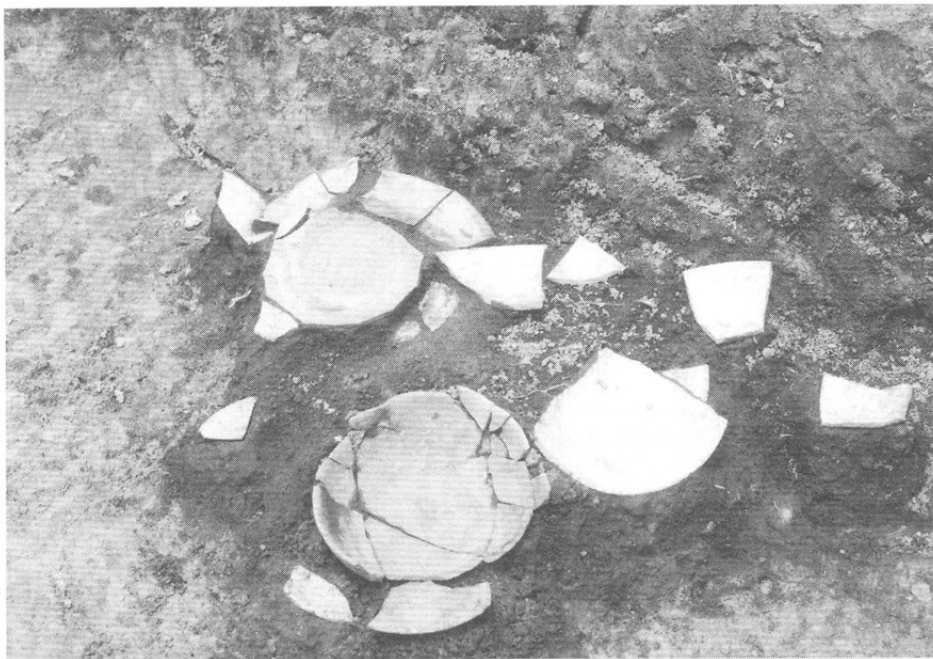
S D11 方形周溝墓周溝断面



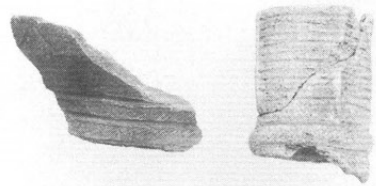
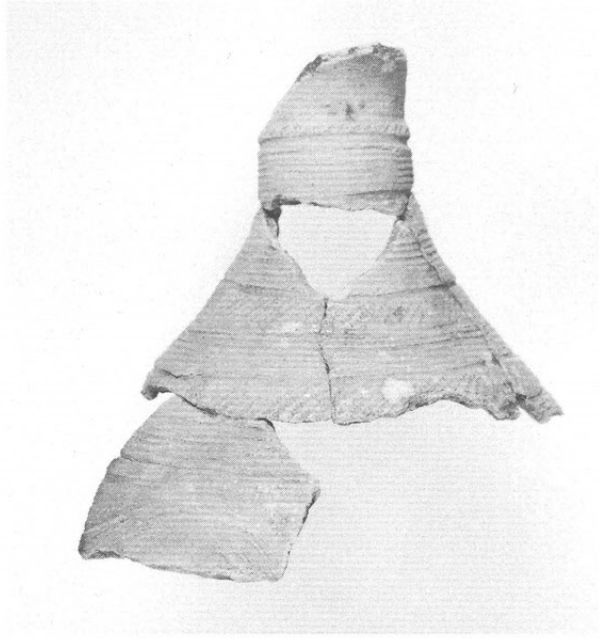
H37 号竖穴住居址（平安時代）



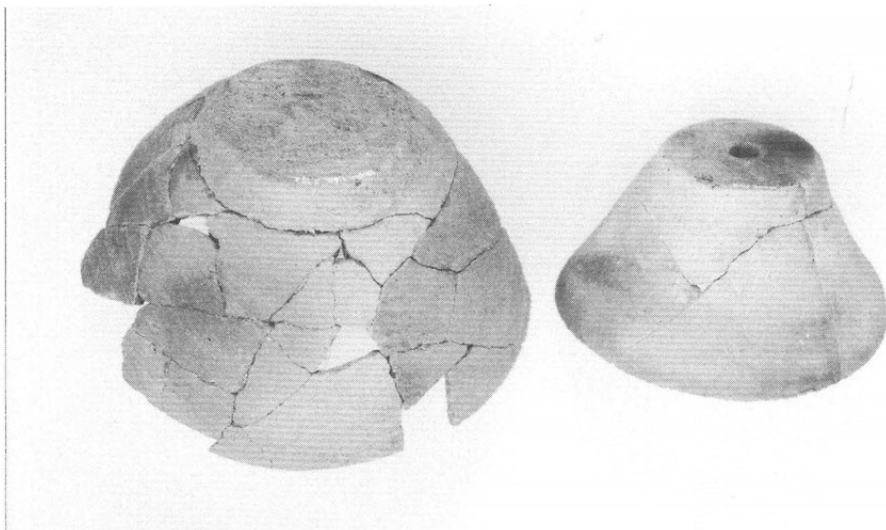
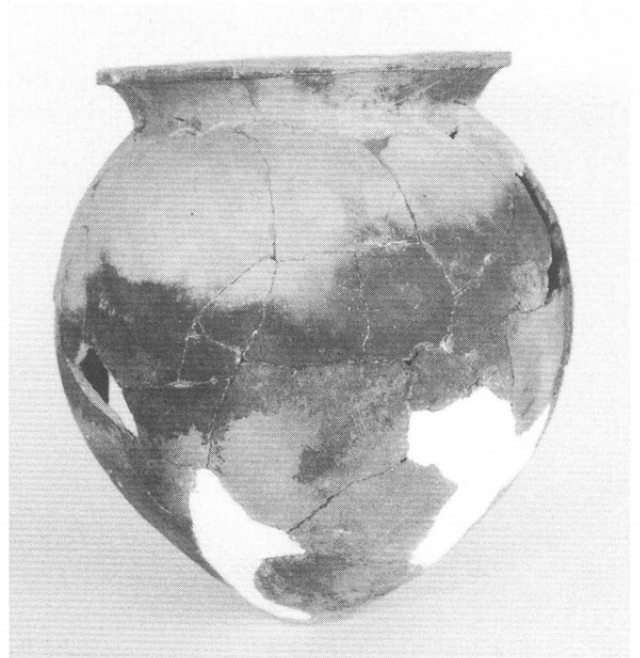
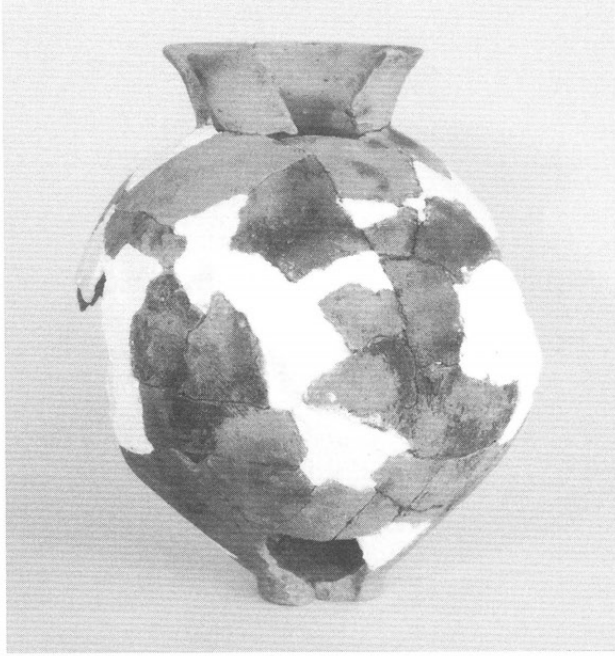
S K 175（平安時代土坑墓）



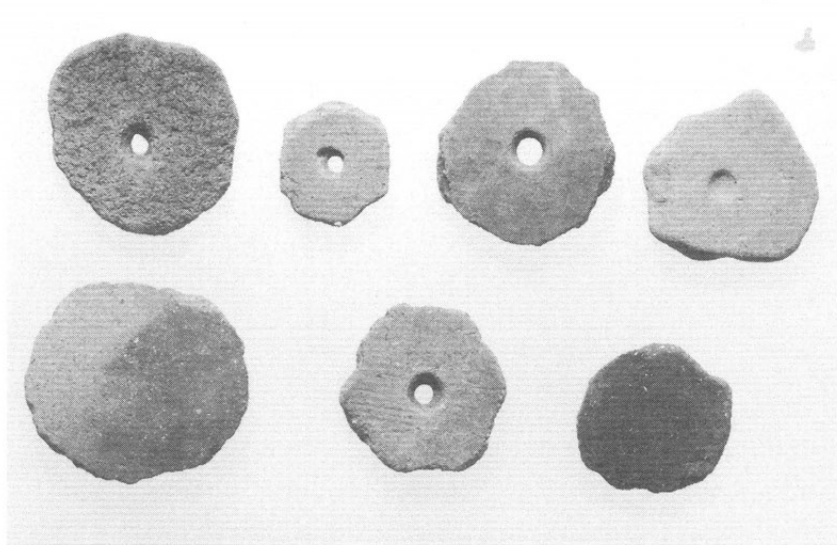
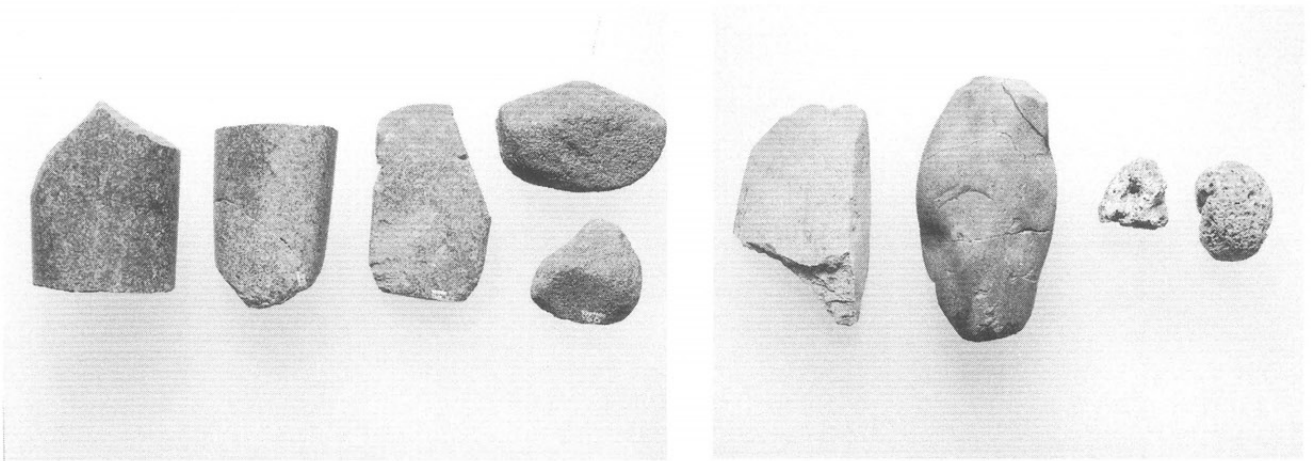
S K 175 内遺物出土狀況



弥生時代の土器



古墳時代の土器



石器・石製品・土製品

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第61集

上野遺跡 X

平成11年3月15日発行

編集・発行 長野県飯山市教育委員会

長野県飯山市大字飯山1,110-1

印刷 (有)足立印刷所
